特70
315

時勢之變

法學士 河上肇 著

東京 讀賣新聞社發行

はしがき

◎本書は河上學士の名著『社會主義評論』の後身也否絶版せられたる該書の身代りなり。

◎時勢の變もさる事乍ら後書を以て前書に比すれば其性質内容も亦變れば換るものなり。

◎前著は放曠的にて後著は小心的也書生論的感興は前著に存し經世的見地は後者に在り。

◎前著は人をして喝采せしめ後著は人をして考慮せしむ前者には音あり後者には味有り。

◎前著は世を忍ぶ學士が覆面の戯ら書きにして其の文體を誤魔化さん爲め僕之に加筆す。

◎否、加筆せりといふよりも寧ろ學士の文章の
著しき特色と思はるゝ箇所を改竄したり。
◎金玉を瓦礫にしたる此齋惡今猶學士に忘れら
れず罪障消滅の爲め何か書けとの事なり。
◎一應は前書に倣いて本文の間に短評を割り込
まんと試みたれど多忙の爲め中止したり。
◎其の爲め結果は○たる上に印刷は大に遲延し
著者折角の一△氣呵成に△に孤負するに至れり。
◎物換り星移れど換らぬは僕と著者の惡緣也盖
に文を汚し今刊行を後らす宿世何の因業。

三月十五日　　瀧野川の村居に於て　北鳴生

序言

舊著『社會主義評論』余に思ふ仔細ありて、之が絶版を其の發行所たる讀賣新聞社に依頼したるに、直ちに快諾せられければ、聊か謝意を表せんとて、急に思ひ立ちて此の小冊子の稿を成せり。

著者別に職とする所あつて、今ま永く此の種の事業に從ふの閑を得ず。故に前後僅に一旬にして此の稿を終ふ。備らざる所固より多しと雖も、之を舊著に比するに、縱ひ世道に益することは等しく是れなしとするも、人心を害するの恐は稍々少かるべき歟。

書中論ずる所、讀者の意に戻るもの多からん。殊に言論の抑壓に關し當局の政策に口實分疏を附するが如きは、最も同職の批難を

蒙る點ならんも、吾人は目下の國情に鑑み、敢て之を以て必要已むを得ざるの『想税』ならん歟と信せんとするに至りたるもの也。故に大に論ずべき當今の問題にして、特に余の避けて之を顧みざりしも亦た間々あり。夫れ今の時代の學者は、日進の智識に一歩も後るゝ勿れと要求せらるゝと同時に、傳來の感情は又た一毫も之を曲ぐる勿れと要求せらるゝ痛切なる矛盾の下に、機に其の生を保てる者なり。而して吾人は、此の強國に生れたることを無上の幸福と爲すものなるが故に、悦んで此の矛盾を甘受し進んで彼の想税を負擔せんとする者なり。譬へば彼のナプスに羅りたる者を看よ。其の恢復期に當つては食慾甚だ熾盛なるのみならず、其の食慾を十二分に滿足せしめ出來得るだけの滋養を吸收せしむ

ることは、一日も早く其の健康を恢復せしむる所以には相違なきも、如何せん其の腸壁の太く衰ふる、俄に與ふるに固形物を以てせば、病忽ちにして復た再起し、遂には以て其の命を墜すに至らん。思ふに過渡時代に於ける國民の精神的食物に於けるも亦た此の如きものあるに非らざる歟。今ま余は外圍の事情を顧みて、此の如く考へざるを得ざるに至れり。敢て問ふ、諸君は則ち以て如何と爲すかを。

若し夫れ時勢の變に關する鄙見の一班に至つては、則ち載せて本書に在るが故に、今ま重ねて呶々の辯を爲さず。昔は日蓮の曰く、彼國に好かりし法なればとて此國にも好しと思ふべからずと。余は將に言はんとす、彼國に好かりし法なればとて其のまゝに盡

く此國にも好しと思ふべからずと。一編の著眼は即ち此の見地に立てるもの也。

終りに臨み、舊著の絶版及び新著の出版に關し多大の好意を表せられし讀賣新聞副社長足立北鷗氏に向つて、謹んで深厚なる感謝の意を表す。

四十三年臘月末九

河上肇

急げどもしばし憩ふてこしかたの
圖もしるし見るたびの興かな
春の雪消ゆるをおしむこゝろより
流るゝおもひしばし盛りし書

要目

第一編　序說編……（自第一節至第七節）……一——一三

第二編　經濟編……（自第八節至十二節）……一四——一二七

其一　未曾有之進步（自第八節至十二節）

其二　未曾有之變動（自第十三節至廿三節）

其三　未曾有之懸隔（自第廿四節至第廿八節）

第三編　思想編……一二八——一七三
　其一　未曾有之進歩（自第廿九節至第三十節）
　其二　未曾有之變動（自第廿一節至第廿五節）
　其三　未曾有之懸隔（自第廿六節至第廿七節）
第四編　日本編……一七四——二〇〇
（自第廿八節至第四十五節）

細目

第一節　未曾有難遭の時代……一
第二節　人は如何にして百獣を征服するに至りし乎……三
第三節　人猿相距る遠からず……七
第四節　人類は道具を製造し得るの手を有す……一〇
第五節　動物的人類と人間的人類との區別……一四
第六節　道具の效果と人類特有の文明……一六
第七節　驚くべき道具の作用の實例……二〇
第八節　道具發展して機械と爲る——是れ未曾有の大事變なり……二四

第九節　機械時代の第一頁——産業革命——人類革命……二六
第十節　生産上に於ける機械の效果——未曾有の進歩時代……二四
第十一節　交通上に於ける機械の效果……三八
第十二節　一國の富強は機械の發達に比例す……四五
第十三節　未曾有の機動時代……四九
第十四節　英國農業の轉覆……五三
第十五節　諸國産業の基礎の動搖……五九
第十六節　都會の膨脹——人口の集中……六〇
第十七節　農民滅じて都會人殖ゆ……六九

第十八節　工業は必らずしも多數の勞働者を需要せず……七五
第十九節　商人の激增……八一
第二十節　強兵亡びて弱卒殖ゆ……八四
第廿一節　軍人氣質の衰頽……九二
第廿二節　分業の發達——自足經濟廢れて營利經濟起る——四民の商人化……九六
第廿三節　婦人問題起る……一〇六
第廿四節　未曾有の懸隔時代……一一二
第廿五節　國際間に於ける文明の懸隔……一二三
第廿六節　貧富の懸隔……一二四

第廿七節　現代階級爭鬪の特性……一一七
第廿八節　社會主義の勃興……一一九
第廿九節　思想界に於ける未曾有の進歩……一二八
第三十節　科學の進歩と其の根本原因……一三一
第卅一節　思想界に於ける未曾有の變動——傳說と科學、信仰と智識との衝突……一三七
第卅二節　進化思想起る……一四〇
第卅三節　物質主義起る……一四五
第卅四節　物質主義流行の原因……一五一
第卅五節　破壞主義起る——其の原因……一六〇
第卅六節　思想界に於ける未曾有の懸隔……一六八
第卅七節　現代政治の要訣……一七一
第卅八節　日本文明の進歩は速度早かりしのみ程度は大に後る……一七四
第卅九節　吾國進歩の後れ居る原因……一七九
第四十節　大に日本特種の機械の應用及製造を盛にすべし……一八三
第四十一節　最も憂ふべきは米作の稚態なり……一八七
第四十二節　日本人は永久に米食人種たるべし……一九一
第四十三節　內地農業の安全なる所以——是れ即ち憂ふべきこと也……一九四
第四十四節　食料を世界に求むべし……一九五

第四十五節　日本國の將來……九七

時勢の變

（一）　未曾有難遭の時代

明治四十三年十二月十六日、雪積りたれど、空既に晴れて暖なる日和なり。櫛干の影簾子にうつれる處、眞無我閑舍の南窓に觚を操つて、始めて『時勢之變』の稿を起す。

諸君、今の時代は實に未曾有難遭の時代なり。思ふに人類あつて

以來茲に數百萬年、しかも今日の如き驚天動地の大變は、既往の歴史に於いて曾て有らざる所なり。古よりして急轉直下と云ふ語あり、乍併、眞に急轉直下の變遷を實現せるは、今の時代を舍いて復た有らざらん。諸君、余は此の驚くべき時代に生れたることを幸福とし、而して此の驚くべき時代の驚くべき事實を、我が拙き筆によりて茲に之を諸君の前に記述するの機會を得たるを光榮とする者なり。

敢て問ふ、何が故に是等の社會は今の時代に於て爾か未曾有なる大變動を惹起するに至りし乎。答へて曰く、他なし、之が根本原因は唯だ一に機械の發明及發達に在るのみ。而して今ま機械の效果及影響を明かにせんとする、吾人は遡つて人類發生の發端時に於ける道具の效果及影響を明かにするの必要あり。

(二) 人は如何にして百獸を征服するに至りし乎

今や吾等人類はあらゆる生物を征服して、實に地上の王たり。而ふ、何が故に然ることを得たる。

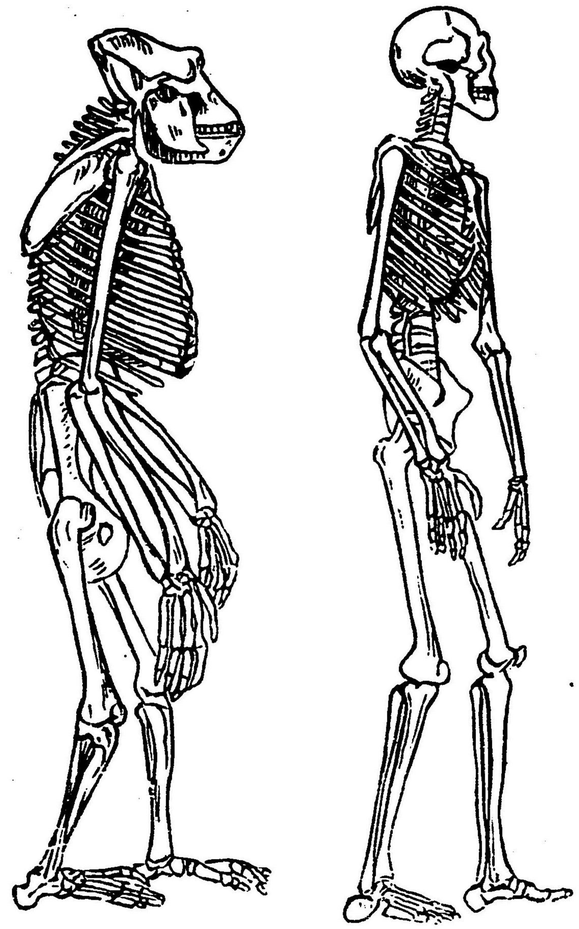
蓋し吾等人類が此の地上に於いて今日の如き全盛の勢を占め得たるは、誠に近時の事に屬す。これより以前に、各種動物の盛衰興亡の歴史あり。今ま試に其の一二を述べんか、或る時代に於いては、蛛蝪の一類嘗て非常に繁殖したる時代あり。古生物學者の研究に依れば地上を匍匐せしものゝ中、大なるものには身長十六間

に及べるあり。空中を飛翔せるものに在つては、其の翼を擴げん
に長さ十三間に餘れるあり。海中を游泳せるものに在つては、其
の大きさ今の鯨に似たるものあり。此の如き巨大の體軀を具へ
たる蜥蜴の一族は、嘗て陸となく空となく海となく、到る所に徜徉
し飛翔し游泳して、あらゆる生物を屏息せしめ居たる時代ありと
云ふ。又た或る時代には象の一族、大に其の勢を逞うせる時代あ
り。面して其の象と云ふが又た非常に巨大なる體軀を具へしも
のにて、頭の骨のみにても長さ一間を越へたりしと云ふ。又た或
る時代には、虎の一族甚だ勢を得、短刀の如き牙を有せるもの、到る
所に横行して各種の生物を餌としたる時代もありと云ふ。
此の如く驚くべき體軀と恐るべき武器とを具へたる各種の動物

は、嘗て代る〳〵吾が地上に繁殖し各々相次いで一時の覇を唱へ
たるものなるが、爾來幾多の變遷を經て遂に今日の如き吾等人類
の代とは爲りたる也。然るに怪むべきは此の人類なるものが、既
往に覇を唱へたる各種の動物と異り、別に巨大の體軀を具へざる
のみならず、殆と何等の長所を具へざること也。第一に人は裸體
にして毛を有せず、甲を有せず、皮膚は甚だ薄弱にして物に觸るれ
ば忽ち破れて血を出す。次きに其の齒と云ひ爪と云ひ何れも皆
な不完全至極の物にて、武器としてとても物の用に立つべくも非
す。殊に人は他の四足獸と異り二脚を以て直立するが故に、動も
すれば前に躓き後に倒れ不安定も亦た甚し。今や此の如き劣等
の體軀を有するに過ぎざる吾等人類が、あらゆる生物を征服して

今日の如く地上の到る所に繁殖するに至りしは、如何にも不思議の事に非らずや。前にも云へるが如く、昔の世に於いて此の地上に勢力を逞うせしものは、或は十何間と云ふ程の巨大の體軀を有し、或は短刀にも匹敵する恐るべき牙を有したるものなるに、獨り人類に至つては何等誇るべきの體軀を有せず、何等恐るべきの武器を具へずして、如何にせば能く今日の如く全盛を占むるに至りしぞ。既往の事は姑く舍いて、之を今日の獸類に徴するも、遙に吾等に優りて有力なる體軀と武器とを有するもの少しとせず。試に動物園に遊びて、獅子を見、虎を見、象を見、熊を見よ。とても吾等の敵とし得べき獸類に非らず。然るに是等の獸類が皆な吾等の爲めに捕獲せられ、生き乍ら鐵柵の內に幽閉せられて、吾等が兒輩

（第一圖）



（第二圖）

の玩弄に供せられつゝあるは何が故ぞ。

（三）人猿相距る遠からず

進化論者の云ふ所に依れば、吾等人類は進化の産物にして、言ひ換ふれば下等動物が次第〳〵に進化して遂に今日の如き吾等人類と爲れるに外ならずと云ふ。されば吾等人類に酷似せる動物の今の世に猶は現存するもの多きは毫も怪むに足らざる也。

余は茲に二個の圖を挿み置けり。（アイゲンハルト著、『歐洲氷原時代の人類』より寫す）。第一圖はゴリラの家族を寫眞せるものなり。讀者も知らるゝ如く、吾等人類の仲間にて、ブッシュマン、フューヂアンなど云へる最下等の蠻民には、今日と雖も猶は衣服を有せず

家屋に住はざる者ありて、殆ど是等ゴリラの族と相撲ふなきものの必ずしも稀なるに非らず。其の一はゴリラと人間との骸骨を示せるもの也。讀者もし仔細に此の二個の骸骨を比較せられなば、人猿相距る實に遠からざるの感を起さざるを得ざるべし。

古來人は自ら萬物の靈長なりと唱へて、人と他の動物とは、天と地と云ふが如く懸け離れたるものゝ如くに思ひ做せしと雖も、扨て仔細に點檢せば人猿相距る遠からざること誠に以上の如し。固より今日吾等の文明は非常なる進歩を遂げたるが故に、其の文明の程度は之を他の獸類に比するに實に天地の懸隔を存すと雖も、そは文明の進歩したる後の話にて、之を人類發生の發端時に遡れば、其生活狀態今日の最下等の蠻民にも猶ほ劣りたるべく、從つて人猿殆ど分つに由なかりしなるべし。

然るにも拘らず、今日猿類其他の畜類は次第に衰亡の運に趨ひ、獨り人類のみ之に反して益々地上に繁殖し愈々其の文明を發揮しつゝあるは、抑々何の理由に本く乎。

泥んや既に前節に述べたるが如く、吾等人類に優りて或は驚くべき偉大の體軀を有し或は恐るべき猛烈の武器を有するの獸類古來敢て少からざるに、吾等人類は抑々何の長所あつてか、能く是等の獸類を征服して今日地上の王たるに至りしか。之を要するに、ゴリラ、猩々、猿の類に比ぶれば殆ど分つ所なく、獅子、虎、象の類に比ぶれば遙に劣る所あるべき吾等人類が、今日の如き盛觀を呈するに至りたるは、吾等の不思議とせざるを得ざる所也。

此の日、筆置きこと雖の如し。朝來、執つては擱き、擱きては執り、纔に以上を稿し畢ぬ。

(四) 人類は道具を製造し得るの手を有す

十八日亦た晴る。終日塾居して今日は大に稿を進めんことを思ふ。

扨て人類は如何なる長所あつて他の動物を征服するに至りしか、人類は如何なる點に於いて他の動物と分つ所ある乎、是れ余が以上の二節に於いて假に提出し置きし疑問なるが、此の疑問は、人類が手を有しつゝあるの事實に着目すれば直ちに解釋せられ得る所なり。

吾等は通常畜類を輕蔑して四ツ足と云ふ。げに吾等が能く兩脚を以て直立し、別に左右の手を有するに至りし事は、誠に吾等人類の跨りとすべき一大特徴にして、此の双手こそ實は最も驚くべく最も恐るべき人類特有の一大武器と謂ふべけれ。

手と云へる武器の特徴は、それが生産力を有する點に在り。詳言すれば、手は手として終らず、手は更に手を生産し、かくて無限の膨力を有する點に在り。即ち一旦手にして備はらんか、吾人は其の手に依りて刀劒を作り、弓箭を作り、銃砲を作り、或は家屋城堡を設け、或は風力電力を驅役し、或は汽車汽船を走らせ、更に進んでは或は飛行機なんど云ふものを作り出して自在に空中を飛翔せんと

す。然るに人類以外の畜類に在りては或は生れ乍らにして短刀の如き牙を有するものあり、或は生れ乍らにして十數間に餘れるの翼を有するものありと雖も、しかも彼等は自ら其の武器の改良進歩を企つるの能力なきが故に、或は弓箭の爲めに射られ、或は銃砲の爲めに倒され、遂に人類を敵とするに由なきに至るなり。一切の生物が凡て人類の爲めに征服さるゝに至りしは、人類の手が此の如きの作用を有するが爲めにして、人類の手が此の如きの作用を有するとは實に人類文明の一切の根源たり。試に今日の人類が凡て其の双腕を切斷されたりと想像せよ。吾人は衣服を着ること能はず、耕作すること能はず、牧畜すること能はず、一切の機械は皆な其の運轉を中止し、汽車も走る能はず、電車も動く能はず、而して余が如きは則ち文章を草する能はざるに至らん。知るべし、手は實に人類文明の母なることを。

但併、更に仔細に考ふれば、手を有することは必ずしも人類の特徴に非らず。吾等が動物園に到つて見得るが如く、猿も猩々も亦た各々手を有し、或は樹枝を以て防禦の具と爲し、或は石片を以て殻果を割出する等のことを爲すのみならず、ダーヰンの記載せる所に據れば、倫敦に於ける動物園の猿の如きは殻果割出の用に供せし石片は使用後必ず之を藁堆の下に隠し置き、決して他の猿に使用せしめずと云へり。されば手を有することが普に人類の特徴たらざるのみならず、道具の使用及處有も亦た決して人類の特徴に非らざることを知るべし。故に委しく云へば、發達せる手を有す

ること。が人類の特徴にて、更に之を具體的に云へば、道具を製造し得る程度の手を有すること。即ち吾等人類の唯一特徴たる也。

(五) 動物的人類と人間的人類との區別

人類と人類以外の動物との區別に就いては、見地の異るに從つて種々の答案あり得べし。例へば人が直立し得たることの結果のみに就いて云ふも、余は寧ろ物質的方面に重きを置き、人が是が爲めに自在の手を有し得て始めて道具を製造するに至りし事實を指摘したれども、余と異り精神的方面に重きを置く者は、人の腦髓が直立の爲めに身體の中心に置かれ、從つて精神力の發達の上に著しき利益を有するに至りしの事實を擧げて、人類と人類以外の動物との區別と爲す者あらん。等しく是れ盧山なれども、見地の異るに從つて、或は峰と爲り或は嶺と爲ることあり。乍併少くとも之を經濟上の見地より云へば、前に述べたる如く、道具製造能力の有無と云ふことが、人類と人類以外の動物とを分つ所以の唯一標準なり。思ふに人類なるものが始めて此の地上に發生せしは何時の頃にてありけん、或は數十萬年前の古へなりと云ふ者あり、或は數百萬年前の古へなりと云ふ者ありて、學者の見る所必ずしも一致せざるが如きが、要するに茫々たる太古原始の事は今ま得て確知すべからざるなり。乍去、少くとも今日までの研究に依れば、古代の地層中苟くも人類の遺骨を發見する處には必ず亦た其

の動物として一定の道具を發見するよりして考ふれば、恐らく人類の發生と道具製造能力の發生とは略ぼ其の時代を一にするものならん。否な、假りに道具製造能力の發生が人類發生以後一定の時代を經過したる後のことなりとするも、吾人は其の道具製造能力發生以前の人類を指して動物的人類(Animal man)と爲し、其の能力發生以後の人類を指して人間的人類(Human man)と爲さんとする者なり。而して玆に單に人類と云ふは、固より人間的人類を指すに外ならず。

(六) 道具の效果と人類特有の文明

人一たび道具製造の能力を具へしより以來、人類の歷史は玆に始めて他の動物の歷史と全く其の撰を異にするに至りたり。今まで其の差異を仔細に論せんは、此の小著の能くする所に非らざるが故に、吾人は其の最も主要なるもの二三を採つて其の大體を髣髴せしむるに止めんと欲す。

第一、人一たび自ら其の所要の道具を製造するに至らんか、始めて道具に千種萬樣の差別を生ずるに至る。例へば之を虎に就いて見んか、其の主要の武器たる牙又は爪の如きは、其の一族の者の凡て同樣に所持する處のものなり。甲の虎も一定の牙と爪とを有し、斯くて丙丁戊に至るも亦た略ぼ皆な然らざるは無し。故に虎相集つて社會を成すも、其の社會の分子は皆な同質にして、各々其の特徵とすべ

きものなく、從つて長短相補ふて以て社會的團結の利益を擧ぐること少し。然るに之に反し、人類の所持せる道具は人類自ら製作せし處に拘るが故に、其の種類始めて千樣萬態たり。固より其の先天的に所持せる手足は各人殆ど一樣なれども、只だ其の製作せし各種の道具を有するの故を以て、其の司る所各々相異ることを得。故に甲は耕作に從事し、乙は工藝に從事し、丙は商賈に從事し、以て有無相通じ長短相補ふ。是に於いてか始て社會的團結の大利あり。

第二、動物社會の道具は、或は牙と云ひ爪と云ふが如く各個體の肉體に附着するものなるが故に、其の道具は皆な個體限りのものにて、交換相續に耐へ得ざるのみならず、其の動力亦た一個體の體力に限らると雖も、獨り人類社會の道具は肉體と分離して別に存在する物なるが故に、一人の產物は廣く社會に普及せられ、一代の產物亦た遠く後世に相續せらるゝは勿論、例へば機械の運轉に於けるが如く、數人數十人の體力を合して一個の道具を動かし得るのみならず、水力風力汽力電力と云ふが如き自然力を以て之が動力と爲し得るの利益あり。是れ吾等人類社會の經濟が獨り侵々乎として其の發展に限りなき所以なり。

第三、動物社會の道具は所謂生存競爭適者殘存の自然的法則に依り、極めて長年月を費すの間、纔に若干の進化を爲すに止ると雖も、獨り人類社會の道具に至つては、所謂人爲的自覺的の計劃に本き、其の進步の際限殆ど窮極する所を知らざるの觀あり。

(七) 驚くべき道具の作用の實例

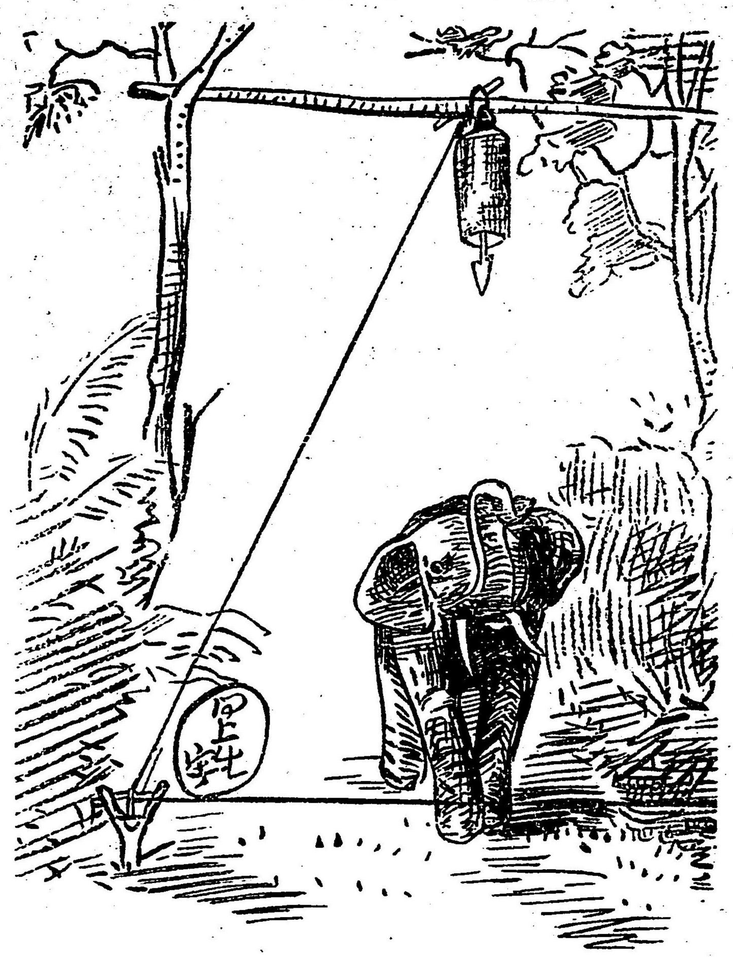
以上吾人は、人の一たび道具製造の能力を具ふるに至りしより、其の歴史は他の動物の歴史と全く其の撰を異にするに至りし所以を說きたり。乍併、所說抽象に偏して切實ならざる所あり。仍つて茲に一二の實例を擧げて更に之を補はんと欲す。

例へば弓と矢と云ふが如き極めて簡單なる道具にても、一たび人類の手に入らんか、彼は之に依りて殆ど如何なる禽獸をも倒すことを得る也。古けれども有名なるラボックの著書に依りて見るに、亞米利加のインヂ人は矢を放つて馬又は水牛を射貫くと云ひ、亞弗利加の土人は之れを以て能く巨象を倒すと云ふ。而してブラ

ルのインヂ人の如きは之を以て屢々海龜を殺す由なるが彼等は之を直接に射たるにては其の滑かなる堅甲の上を滑るに過ぎざるを知るが故に、彼等は先づ空に向つて矢を射、かくて其の矢をして恰も垂直線をなして甲の上に落ちしめ、此の如くにして容易に之を射留むと云ふ。弓と矢と云ふが如き簡單なる道具にても其の應用の自在にして廣きこと此の如し。

抑々吾等が手先きの器用と云ふ事は、文明の進歩に伴ふて次第に退化するものなるが故に、吾等は往々にして原始的道具の效果を輕視するの傾向あるを免れざるが、元來如何に簡單なる石器の類と雖も其の應用はなか〳〵に廣きものなり。曾て、丁抹の貝塚よりは牛及海豹と云ふが如き大なる動物の遺骨出でたるに、道具と

驚くべき道具の力



（カールヴオイレ著『東亞弗利加土人の生活』より）

しては骨又は石にて製造したる極めて簡單なるものしか發見されざりしを以て、或る學者は、此の貝塚を遺したる種族は猶は是等の石器以外に有力なる武器を有し居たるものにて、茲に發見されたる石器は其の簡單なるもの一部に過ぎざるべしとの説を立てたることあり。又た曾て佛國ドルドーニ洞より出でたる骨製の針は、其の製造誠に精巧にして、殊に其の針孔は到底金屬の力を藉れるに非らざれば製作不能のもの如く思はれたるを以て、或る學者は此の洞を以て到底石器時代住民の遺跡に非らざるべしと云ふの説を立てたることあり。乍併、其の後現存せる野蠻人の狀態次第に研究せらるゝに及び、人類は極めて簡單なる道具を以て驚くべき仕事を爲し遂ぐるものなること明白と爲り、上記二地

の遺跡は皆な石器時代住民の遺せしものに外ならざるを確證するに至れり。

(八) 道具發展して機械となる——是れ未曾有の大事變なり

餘り一つ事にのみ停滯し居りては、徒に讀者を倦ましめて却て論旨の一貫を妨ぐることあらん。故に道具の話は姑く之を以上に止むべし。之を要するに、余の見る所に據れば、人類が道具製造の能力を具へしと云ふ事は、人類と他の動物との間に一大懸隔を生せし根本の原因にして、即ち此の能力の有無は、人類と他の動物とを分つ所以の唯一の標準たるべきもの也。然るに玆に驚くべき事件と云ふは、此の道具が今や一躍して機械に發展せしこと也。即ち從來の道具は單に人力の補助を爲すに過ぎざりしに、今や機械てふ道具新たに發明せられて、人は只だ若干の補助を爲さば機械自ら運轉して人世の用を爲すに至りしこと也。今ま一二の例を擧ぐれば、例へば絲を紡ぐに、從來は簡單なる道具を手にて廻はして之を爲したりしに、今や紡績機械なるもの發明せられ汽力を應用して盛に之を運轉するが如く、又た例へば、從來は人を運ぶに駕籠を用ひたりしに、今や汽車電車なるもの發明せられ汽力電力を應用して縱橫に之を疾走せしむるが如し。讀者是等の例に依つて考へられなば、道具と機械との性質の差異稍々髣髴たらん。尤も廣く道具と云へば機械も固より其の中に包含せらるゝ事な

れど、併し道具と機械とにては其の性質の異ると、譬へば蟻と象と等しく動物と云ふも其の性質大に異るが如し。猶ほ機械の效果に就いては追て之を後章に述ぶべけれど、要するに道具の發展して機械と爲りしと云ふ事は古今未曾有の一大事變にして、是れ恰も生物の歷史に於いて彼の道具の發明が人類と他の動物との間に於ける一大區劃をなすに至りしと同じく、人類の歷史に於いては此の機械の發明たる正に新人類と舊人類との間に於ける一大區劃を爲すものたる也。吾人の見る所に依れば、道具時代の歷史は即ち舊人の歷史なり、舊時代の歷史は即ち新人の歷史なり、新時代の歷史なり。機械時代の歷史は即ち動物と人類との差の如し。即ち人は嘗て數百萬年の古へに於て、一個道具の發明に依り動物的人類(animal man)の域を脫して人間的人類(human man)と爲りしと等しく、今や機械の發明に依り更に一段の進化を爲して新人類と稱すべき別種の人類に進みつゝある也。吾人は此の如くに觀ず。故に吾人は、現代を以て實に未曾有難遭の時代と爲すものの也、數百萬年を費して始めて見ることを得べき萬古稀覩の時代と爲すもの也。今の時代の進歩を以て歐古震今の偉觀と爲すもの也、今の時代の變動を以て驚天動地の大變と爲すもの也。讀者請ふ怪むを已めて姑く吾人の言ふ所を見よ。

此の日終日蟄居、來訪の客數名、朝より夜に入るまで遂に屋外に出でず。夜未だ深からず、稿亦た豫期の如く進まずと雖も、神稍々倦むが故に、筆

を投じて寢に就く。

(九) 機械時代の第一頁——産業革命

——人類革命

十九日、今日も亦た快晴一天片雲なし。朝來外出、午前十一時始めて筆を執る。

吾人は前節に於いて、機械の發明に伴ひ、舊人の歴史たる道具時代正に去て今や新人の歴史たる機械時代に入れることを述べたり。然らば謂ふ所の機械時代は果して如何なる時如何なる國に於いて始まれりとすべき乎。曰く、今を去ること約百三十年前、十八世紀末の英國に於いて起れり。固より精確なる年代を劃し得べき性

質のものに非らずと雖も、若し強いて時代を立つれば、吾人は西暦一千七百六十九年を以て新人の歴史に於ける紀元第一年と爲さんと欲す。即ち我朝に在つては女帝後櫻町天皇の明和六年、加茂眞淵、青木敦書の二學者正に此の年を以て逝き、西洋に在つては近代の二大豪傑たるナポレオン、ウエリントンの兩人正に此年を以て生れたり。乍併、是等人々の生死代謝は人類の歴史に於いて左したる事件には非らず。只だ最も記憶すべき一大事件と云ふは、かの有名なるワットの蒸汽機關が正に此の年を以て特許を得るに至りたることなり。これより以降、發展の大業は破竹の勢を以て進み、其の盛觀譬ふれば春來つて百花一時に開くが如く、諸種の機械は相次いで發明せられ、又た相次いで普及せられ、此の如くにし

て社會は全く其の面目を一新し、道具時代遂に去つて機械全盛の今の時代と爲るに至れり。世之を稱して産業革命と云ふ。革命と云ふは甚だ宜し、其の變動の急激にして且つ根本的なる誠に一大革命の名に値す。只だ之に冠するに産業の二字を以てするは甚だ當らず、吾人を以て之を見れば、曾に産業の革命たるのみならず、實に社會全般の一大革命たり、人類總體の一大革命たり。請ふ、以下進んで爾か云ふ所以を論述し見ん。

（註）吾人は千七百六十九年を以て機械時代の紀元第一年とすると述べたれども、此の年を以て特許を得たるワットの蒸汽機關は、始め礦山に於ける排水の爲めに使用されたるに過ぎずして、其の各方面に應用さるゝに至りしは、固より後年のことに屬す。例へば之れを紡績業に就いて云へば、之に蒸汽機關を應用するに至りたるは千七百八十五年英國ノッチンガハム州のパップルキックを以て嚆矢と爲し、其の後千七百九十二年にはマンチェスターに於いて、千七百九十九年にはグラスゴーに於いて、等く蒸汽力を應用するもの出でたれども、總じて云へば、十九世紀の初期二十五年間は寧ろ水力の主として應用され居たる時代にて、蒸汽力の之れに代るに至りしは更に其れより後のことなり。人類の歴史と云ふ廣き立場より云へば、此の如き僅々六七十年の事は誠に一時と云ふて差支なけれども、萬一の誤解ありてはと餘事ながら之を茲に附記するものなり。

猶は又た、機械の發明そのものも決してワットに始まれるに非らず。吾人は諸種の機械の中ワットの蒸汽機械を以つて最も有力なる影響を世界に及ぼせしものと見るが故に、假りに其の特許を得たる年代を以て機械時代の第一頁と爲し置きたれども、之れより以前機械の發明を爲したるもの必ずしも絶無なるに非らず。即ち紡績機械に就いてレキス、ボールの特許を得たるは千七百三十八年にして、織物に就いてヂョーン、ケイが飛梭の發明を爲したるは千七百五十三年なり。故に吾人が千七百六十九年を以て機械時代の第一頁と爲すと云ふは、必ずしも精確なる區劃を爲すの意に非らず。乍併、凡そ此の年代を一期として偉大なる諸種の發明相次いで生ずるに至りしは顯著なる史上の事實にして、例へば之を紡績機械に就いて述ぶれば、ハーグリーブスの發明は千七百七十年にして、其の特許を得、翌千七百七十一年にはアークライトの發明あり、更に千七百七十九年にはクロムプトンの發明あり、而して千七百八十五年には織物機械に就いてカートライトの特許を得たるあり、學者之を名けて產業革命の烽火たる四大發明と云ふ。而して是等の機械に向つて其の動力を供給するに至りしは纏てワットの蒸汽機械なり。故に吾人は姑くワットの蒸汽機械が其の特許を得たる千七百六十九年を以て機械時代の第一頁と爲さんとするもの也。

（一〇）生産上に於ける機械の效果——未曾有の進歩時代

機械發明の年代及び事實の詮索は略して之を以上に止め、吾人は進んで機械の效果一斑を說かん。

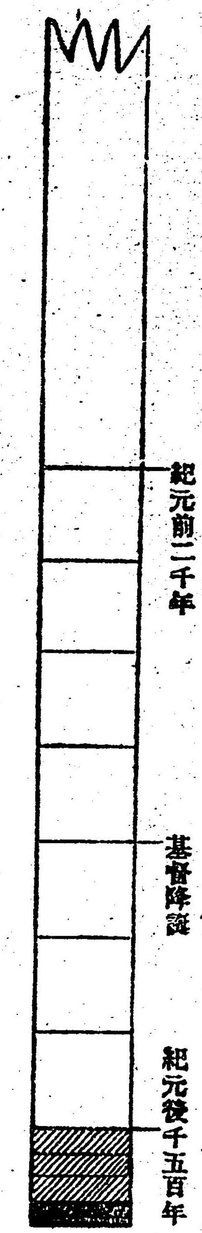
吾人は前節に於いて、ハーグリーブスなるものが千七百七十年に紡績機械の發明を爲せしことを述べしが、當時此の機械の發明の爲めに生産力を增加せしことは約二百倍にて、即ち從前二百人分の仕事たりしものが此の機械の發明の爲に俄に一人分の仕事たるに至りしと云ふ。然るに今日に於いては一人の職工一時に一萬二千錘以上を運用しつゝあるが故に、其の生産力は略ぼ一萬二千倍に上りたりと云ふことを得んか。（ギビンス著『現世紀の經濟的及產業的進步』一九頁）。

留針の例は、アダム・スミス以來屢々經濟學者の引用する所のものなり。蓋し彼の既に述べたるが如く、若し簡單なる道具を以て何等の分業を爲すことなくして各戶に之を製造すとせんか、一日多くとも二十本以上を生産するは不可能ならん。（カナン校定本『國富論』六頁）。然るに今日精巧なる機械を用ひて十分に分業の利益を擧ぐる處にては、一日一人の職工能く千五百萬本を生産す。（セリグマン著『經濟原論』二九二頁）。即ち之を二十本と比較すれば正に七十五萬倍なり。是れ豈に驚くべき機械の效果に非ずや。

思ふに人類あつて以來玆に數百萬年、若し吾等の生産力にして常

に此の如き勢を以て進歩したるものなりとせんか、其の生産力は今日非常の勢に達し居るべき筈なれども、而かも其の然るを得ざる所以のものは、現代の進歩が全く未曾有なる史上の特例に屬するを證明するもの也。即ち今の時は、吾等人類が既往數百萬年を費して纔に得たるより以上の進歩を、僅々百年乃至數十年の間に實現しつゝあるの時代なり。吾人は曾て舊著『社會主義評論』に於いても亦た此の事を述べ、因みに紡績に關する一圖を揭げたることありしが、今ま復た之を左に轉載す。（イリー著『產業社會の進化』一四頁に揭ぐる所に據る）。

更に之を農業に就いて見るに、例へば米國のダコタ地方は農業上機械の應用最も廣く行はれつゝある處なるが、此の地方に於いては一人の職工が一ヶ年に生產する處の平均產額は、小麥五千五百ブッセル（約千百石）に相當すと云ふ。而して製粉業の盛なるミネソタ地方に在りて機械の應用最も完全なる工場に於いては、一人の職人が、上記五千五百ブッセルの中より種子料として五百ブッセルを



引きたる殘額五千ブッセル(千石)の小麥をば、一ヶ年の間に凡て之れを製粉し終へ、斯くて約千樽の小麥粉を作る割合なりと云へり。即ち一人一日の製粉力は實に三石以上と爲る割合なり。而して一樽の小麥粉と云ふは略ぼ一人一ヶ年の食料と爲るものなるが故に、千樽の小麥粉は即一ヶ年間に於ける千人分の食料なり。然らば彼のダコタ地方に於ける農夫と、ミネソタ地方に於ける職人と、前後合計二人の一ヶ年間に於ける勞働に依りて約千人分の一ヶ年間の食料が生産せらるゝ譯合なり。是れ豈に驚くべき生産力の進歩に非らずや。

(一一) 交通上に於ける機械の效果

更に之を交通の方面に就いて考ふるに、例へば昔日道具時代の旅行に在りては、津輕よりして薩摩に至るに、馬上の急使を以てするも二十三日乃至三十日を費したるものが、(山路愛山氏著『源頼朝』二二頁の計算に據る)、今日は電信電話と云ふものありて殆ど坐ながらにして通信するを得るが如き、其の間に於ける通信速度の激増は豈に驚歎に値せずや。古歌に曰く

都をば霞とともに立しかど
あき風ぞ吹く白川の關

然るに今日は霞と共に日本をたちて秋風吹く頃には世界を漫遊して歸る者もあるぞかし。余が家の祖父は余が父の猶ほ幼き頃、黄泉の客と爲り給ひしが故に、電信も電話も汽車も汽船も皆な之

を見すして世を去り給ひたりしが、祖母は今や八十餘の高齢なれども猶は甚だ強健なるが故に、嘗て吾等が東京に住ゐたりし頃は彼地に遊びに來給ひしことあり、又た京都に移りてよりも去る頃一たび來遊せられしが、之につけても今更に驚かるゝは今の時勢の激變なり。五十年前誰か今日あるを豫想したるものあらん、五十年前の人を地下に起して告ぐるに今日の事を以てするも誰か之を信ずる者あらん。

初めて旅客用の鐵道の建設せられたるは今を去る僅に八十餘年前のことにして、即ち千八百二十五年英國ストックトン・ダーリント ン、二地の間に敷設されたるものを嚆矢と爲す。乍併、こは所謂馬車鐵道にして決して今日の如き汽車鐵道には非ず。蓋し汽力を

客車に用ふるが如きは初め危險視されたる所にて、最初の中は只だ貨物の運搬にのみ之を使用せしに過ぎず。されば今日の如き意味の汽車鐵道としては、彼のリヴープール、マンチェスター間に敷設されたるものを以て嚆矢とせざるべからず。而して此の鐵道の初めて開通されたるは千八百三十年九月十五日にして、今を去ること纔に八十年前の事なり。而して之より後十四年(即ち千八百四十四年にして今を去ること約六十六年前)かの有名なる經濟學者マカロックが『商業辭書』の鐵道の項に於いて記述せる左の一章の如きは、今更ながら人をして現代進歩の餘りに急激なるに驚かしむ。其の文の大意に曰く、

『リヴープール、マンチェスター鐵道の延長は殆ど三十一哩あり。

而かるに此の兩地間の交通が、今日汽車を以てすれば、僅々一時間半を以て爲し遂げらるゝと云ふに至つては、豈に驚くべき一大進歩に非らずや。是れ恰も此の二大都市の距離を縮めて、倫敦の東部より西部に到るの距離に等しからしめたるもの也。』

然るに今や兩地間の交通は僅々四十分餘を要するに過ぎず。蓋し此の鐵道が始めて開通したる時の速度は、既に千八百八十五年に至つて正に二倍するに至りしもの也。彼又た曰く

『倫敦よりマンチエスター、リヴープールに到るの鐵道は、今やランカスターまで延長せられ、遠からずして更にグラスゴーまで延長せらるべきが、今のまゝを以てするも、こは實に如何なる國に就いて云ふも未曾有最大の公共的事業にして、近世の富、科學及び文明の驚くべき結果の一なり云々』

僅に倫敦リヴープール間の鐵道を以て世界未曾有の最大工事と爲し、之を以て近世文明の驚くべき産物の一なりと爲したる彼れマカロックを、今ま地下に起こして現代に於ける鐵道發達の狀態を見せしめなば、彼れ果して何と云ふならん。單に之を米國のみに就いて云ふも、其の鐵道の運輸力は今日千三百萬人の勞力と五千三百萬匹の馬力とを加へたるものに匹敵し、其の費用實に四十四億圓を要すべしと云ふ(ルボン著、前揭書、二一五頁)。又た之を英國に就いて見るに、千八百八十七年に於いて鐵道にて運輸されたる貨物を馬背にて運送することゝせんか、其の費用は三十七億三千五百萬圓に相當し、同年に於ける國民總所得の三分の一を要する

計算と爲り、馬匹ならば三百萬頭を要し、當時存在せし凡ての馬匹を提出するも猶ほ大に不足することゝ爲る。（ゼーンス著『水路及水運』一五、一六頁）。

げに驚くべきは今の時代の進歩なり。看よ、空中飛行と云ふが如き吾等常人の夢にも見ざりし事柄が、今や着々として實現せられ、佛國の如きに於いては既に之に關する特殊學校の設立をさへ見るに至りたることを。思ふに吾等生くること更に半世紀ならば、世界の狀態は更に復た全く面目を新たにするに至らん。小著一卷、今ま人の願る所と爲らずとするも、吾輩之を家に傳へて、もし生くることを得ば、今より五十年の後、復び出して以て子孫と共に之を回顧の料とせんことを思ふ。

（一二）一國の富強は機械の發達に比例す

之を要するに、今の時代の進歩は眞に未曾有の速度なり。既往の歷史に於いては數十年數百年乃至數千年を經て始めて實現されたる程の進歩が、否な遙に之に優るの進歩が、今の世に於いては僅に數年乃至數十年の間に實現されつゝあるなり。而して上來略ぼ說いて明かならしめたるが如く、此の如き未曾有なる進歩の根本原因は即ち機械の發明及び發達に在り。されば看よ、初めて是等機械の發明と應用とを諸國に先つて試みたる彼の英國は、十九世紀の初頭以來國勢隆々として殆んど之に匹敵するものなかり

しを。而して又た看よ、是等機械の歐米諸國に傳はるに從つて、歐米諸國の國勢亦た俄に殷々乎たるに至りしことを。殊に獨乙の如きは、今や機械の製造に於いて世界第一と稱せらる。怪むなきなり、今を去る僅に三十年以前に在つては歐洲第一の貧國たりし獨乙が、其の殷富今日に於ては能く英米と頡頏することを。

（註）獨乙に於ける機械製造能力の發達は左の一表に依て知るを得べし。表は其の機械輸出高を示せる者也。（クロポトキン著『農場、工場及び仕事場』一九〇七年第五版、二二三頁。）

	一八九〇年	一八九五年
機械及其の一部	二四、五〇〇、〇〇〇円	三二、一五〇、〇〇〇円
裁縫機械及其の一部	三、一五〇、〇〇〇	四、三〇〇、〇〇〇
機關車及汽車	二、八〇〇、〇〇〇	四、二〇〇、〇〇〇

猶はレキサスの計算（シュモラー編纂『年報』第十九卷第一號二七五頁）に據れば、獨乙帝國内に於いて使用せる機械の動力は千八百七十九年には四百五十一萬餘馬力なりしに、千八百九十二年には殆ど倍加して七百二十萬餘馬力と爲れりと云ふ。

若し夫れ東洋に於いては則ち我日本あり。尻に西洋文明の輸入に着目し、維新以來大砲軍艦の類を始めとして、電信電話汽車汽船より諸種の工業機械に至るまで、苟くも利用するに足るべきものあらば、一々先進國に模倣して敢て後れざらんことを期せしが故に、則ち能く東洋の覇權を握るを得たり。されば先きには清國と戰つて臺灣を合せ、後には露國と戰つて樺太の半ばを得、今歳又た

遂に朝鮮を併すに至りぬ。思ふに國威の隆盛能く今日の如くなるを得たるは、固より由つて來る所久しきものあるべしと雖も、而かも近くばかの機械の效果に待つ所尠しとせざる也。例へば如何に我國民が忠義の精神に富み、乃木大將や東鄕大將が如何に古今無双の良將なりしとするも、單に弓矢を以てしては到底旅順の砲塞も陷るに由なかしなるべく、又た覺束なき帆船を率ゐ居たるにては到底かのバルチック艦隊を擊破するに由なかりしならん。是に於てか吾人は今更ながら維新の前後に於ける我國先覺者の恩を想ふと共に、機械の效果轉々又た大なるものあるを思はずんば非らず。

要するに今の文明は即ち機械の文明なり。而して今の時代は即ち道具時代正に去つて機械時代に入れる過渡の時代なり。從來徒歩して旅行したりし者が正に汽車に乘り移れる時代なり。然らば其の進歩の速度の未曾有に急激なる何ぞ怪むに足らん。げに今の時代にてある也。

此日、午前學校に出でゝ圖書館に入る。午後大阪毎日の某君來訪、夕刻長友某君來談。夜十一時半、筆を擱んとするの時、遠く汽車の走るを聞く。

（一三）未曾有の變動時代

昨夜筆を擱くの後、書を讀んで深更に及ぶ。今朝目を醒むれば殆ど正午、筆を執るの時既に一時を過ぐ。空曇りて寒き日、家人煤掃

ひに忙し。

吾人は既に今の時代を以て未曾有なる進歩發展の時代と爲したり。然るに『凡ての進歩は即ち變化を意味す』（スペンサー）。故に今の時代は又た未曾有なる變化動搖の時代なり。

ル、ボン曰く（前掲書、二一三、四五頁）

『恐らく今の時代は、最も短き時日の中に最も大なる變化の起りつゝある史上稀有の時代なり』……『産業の急激なる變遷は生活の凡ての狀態を革命したり。蓋し十九世紀の初頭に至るまで、既往數千年の間、産業上の道具は殆ど何等の變化を爲さざりしもの也。即ち之を以て、四千餘年前の遺物たるエヂプトの墳墓に發明せらるゝ彫刻物と比するに、其の主要なる部分に於いては全く相等しきもの也。然るに百年を經たる今日に於ては、現時の産業と古代の産業とを比較すること全く不能となれり』……『最も多くの血を流せし革命も、最も長期に亘りし戰爭も、其の結果は、到底此の世紀に於ける科學上の發明のそれと比すべくもあらざる也。』

ギッピンス又た曰く（前掲書、三頁）

『それは近世歐洲及び新大陸の面相を根本的に變化したる革命なり、何となれはそは一の新人類を作り出だせしものなれば也。―即ち是等の新人類は、手の代りに機械を以て仕事を爲し、僻邑窶村に散布せし代りに都會に集住し、他の國民と交易することに於けるが如く、その工場の運轉は人手に依らずして自然

の大力に依り、その市場は一市一國に限らずして實に世界その
ものたり。』

思ふに凡そ既往百年間の歴史を叙せんとする者、誰か此の如きの言を發せざるものあらん。實に此の間の歴史は、吾等が如何なる形容詞を用ふるとも決して誇張に陥るの恐なき、未曾有變動の時代なり。而して吾人は既に前節に於いて、機械の發明に伴ふ生産交通の急激なる進歩を叙述することに依つて、同時に變化の一面を叙述し終へたりと雖も、猶は節を改めて少しく他の一面の變化を説かん。

(一四) 英國農業の轉覆

吾人は先づ交通機關の進歩に伴ふ變動の一斑を述べん。思ふに交通機關の進歩の爲め惹起されたる變化動搖の中その最も顯著なるものは、英國農業の轉覆に在らん。之を歴史に徴するに、かの英國が初めて穀物を輸入するに至りたるは千七百六十六年乃至千七百七十三年の間にして(ウェスト著『穀價』一〇頁)、即ち余が先きに機械時代の第一頁を爲すと云ひたる千七百六十九年の前後に當れるなり。然るに其の後百年を經たる千八百六十六年に於いては既に七萬七千餘圓の輸入をなし、更に千八百八十三年には其の額倍加して十五億七千五百餘萬圓の輸入を爲すに至り、(ギッピンス著『英國產業史』四四〇頁)かくて今日に至つては一ヶ年の消費量三千八百六十萬石の中、内地にて生產する額は僅に千二

百六十萬石に過ぎずして、差引殘額二千六百萬石は凡て海外よりの輸入に仰ぎつゝあり。（ル、ズン著『社會主義の心理』英譯二二四頁）。

扨て此の如く英國に於ける穀物の輸入が連年增加の一方に在るは需要增加の爲めなるかと云ふに、決して然るには非らず。固より既往百年の間に於いて人口も甚しく增加したれば、穀物に對する需要も亦た之に從ふて增加したるには相違なけれども、その需要增加が即ち輸入增加の原因たるには非らず。輸入增加の眞因は海外にて生產せらるゝ穀物が廉價なるに在りて、而して其の廉價なる穀物が此の如く盛に輸入せらるゝに至りしは即ち運賃下落の爲めなり。而して其の運賃の法外なる下落は全く汽船と云ふ新たなる交通機關の出來たる爲めにて、即ち蒸汽機關などと云ふ恐るべき機械が發明され普及さるゝに至りたる結果に外ならず。例へば米國ニューヨークより英國のリヴープールに至る海上三千二十五海哩間の運賃を見るに、前に述べたる千八百六十年の頃（ワット蒸汽機關の發明後百年）に於いて小麥一ブッセル（約二斗）の運賃は既に二十四錢に下落し居れるが、更に千八百八十四年の頃に於いては遙に下落して僅に二錢五厘と爲れるを見る。即ち僅に二十餘年の間に於いて其の運賃は十分の一に減じたる次第なるが、之と同時に穀物の輸入額も亦た此の間に倍加するに至りたること上述の如し。

交通機關の發達の爲に運賃は總じて此の如く下落しつゝあるを

以て、新開國の廉價なる農產物は滔々として舊開國に流入し、現に最近廿年間西歐諸國の農產物は、穀物、羊毛、酒精、砂糖等其の價格は概して半減するに至れり（メリーヌの計算）。而して『此の事より生ずる最も恐るべき不便は、農業をして不安定の狀態に陷らしめ、爲に若干の國をして、全く其の農業を拋棄すと云ふが如き、必ずや異日重大なる結果を生ずべき事を決行するの餘儀なきに至らしむるに在り』（ル、ボン）。而して以上記述し來りたる英國の如きは現に其の最も著しき實例にして、即ち海外の廉價なる農產物の輸入に伴ひ、此の國の農業は最近三十年の間に於いて根本的に頽廢し盡すに至れるなり。カイラードの計算に依れば、千八百七十五年より千九百年に至る二十五ケ年間に於いて、農地の價格下落の爲

に生ぜし損害は約九十億圓に達すと云ひ、更に嘗てはエコノミストの主筆たり經濟辭書の編者たるを以て有名なるパルグレーヴの計算に據れば、千八百八十三年より以降二十ケ年間の損害は約八十億圓に上ると云へり。要するに最近二三十年の間に於ける農地價格の下落より生ぜし損耗は略ぼ八九十億圓と見て差支なかるべし。若し之に加ふるに、小麥作付反別の減少、農家資本の損失等を加算するに於いては、最近三十年の間に於ける英國農業の總損失額は略ぼ百七十二億八千二十四萬圓に上るの計算なりと云へり（パルグレーヴの計算）。猶ほ之を土地に就いて云へば、此の三十年間に於いて荒廢して原野と爲りたるもの、耕地百十萬二千町歩、牧草畑地三十一萬町歩、合計無慮百四十一萬二千町歩に及ぶ。

是れ即ち我國米作付總反別の半ばに相當するもの也。思ふに僅々三十年の間に於いて、一國農家の損失が百七十二億圓を算し、耕地の荒廢して原野と爲りたるものが百四十萬町歩を數ふと云ふが如きは、如何にも驚くべきの一大變動に非らずや。夫れ人類の歷史あつて以來玆に五千年と云ふと雖も、誰か既往の歷史に於いて此の如く驚くべき一國經濟上の大變を見たるものあらんや。吾人が今の時代を以て未曾有なる變化動搖の時代と爲すこと、此の如きの事例に照らして考ふれば、讀者に於いて恐らくは又た異存なかるべし。

此の日午後、筆を擱いて圖書館に入り、歸途學友某君を訪ふて夕に至る。夜、京都日の出新聞の某君來談。筆を擱くの時、今夜亦た十一時半。學生あり、詩を吟じて吉田山を下り、其の聲遠く眞如堂の北に走る。

(一五) 諸國産業の基礎の動搖

二十一日、午後三時始めて机に向ふ。朝來曇天、冬らしき、京都の冬らしき日和なり。

以上英國の一例は固より其の最も顯著なる事例に屬すと雖も、概して諸國産業の基礎の動搖せること今の如きは古來稀なり。蓋し『科學上及び産業上の諸種の發明は凡て吾等が生存の狀態を一變したるものにて、即ち今の時代に於ては、實驗室内に於ける單純なる一個の化學上の發見も、忽ちにして一國を衰へしめ忽ちにして他國を富ましめ、亞細亞の中央に於ける穀物の耕作は、歐洲の

全土をして其の農業を拋棄せしめずんば已まざらんとす。實に機械の發達は文明國民の大部の生活に革命的變動を惹起したるものなり也』(ル、ボン著『社會主義の心理』英譯二頁)。即ち獨り農業の基礎のみ動搖するに至れるに非ず、凡の産業の基礎が皆な一樣に動搖するに至りたれども、只だ之を西歐諸國に就いて云へば、何れも皆な人口稠密なる舊開國なるが故に、海外諸國の廉價なる農産物の影響を受くること最も甚しく、從つて特に農業の基礎最も動搖を感ずるを免れざるなり。故に吾人は舊開國に於ける農業の衰頽を以て、現代に於ける一般的變化の一と爲すを得べし。

(一六) 都會の膨脹—人口の集中

舊開國の農業が交通機關の發達の爲め一般に打擊を受けたると同時に、其の工業組織も亦機械の發達の爲め一大變化を受くるに至りたり。而して其の工業組織の變化が齎らせし結果の主なるものは、都會に於ける人口の集中に在り。今吾人は此の人口の集中を以て、現代に於ける變化動搖の第二例として擧げんと欲す。蓋し『近世の工業的都市は機械の産出せし最大の産物にして、且つ或る意味に於いて其の最も特有の産物と謂ふべし』(ホブソン著『近世資本主義の進化』再版三二四頁)。請ふ如何に機械の發達に伴て都市の人口の膨脹するに至りしやの事實を掲げん。

先づ英國に就いて見るに、アーサー、ヤングの計算に據れば、千七百七十年頃(即ち余が機械時代の第一頁と爲せし頃)の英國人口は都

鄙正に相半ばしたりと云ふに、爾來都市の人口は次第に增加せしに反し村落の人口は益々減少せしこと、實に左表の如し。（ホフマン著、前揭書、三二六頁）。

	一八六一年	一八七一年	一八八一年	一八九一年
都會	六二、三	六四、八	六六、六	七一、七
村落	三七、七	三五、二	三三、四	二八、三

然るに更に千九百七年の調査に據れば、イングランド及びウェールスを合して人口總數三千二百五十二萬七千八百四十三の中、都會の人口は二千五百五萬八千三百五十五にして、村落の人口は僅に七百五十萬に過ぎず。則ち其の割合は都會の人口七割七分を占め、村落の人口は僅に二割二分を占むるに過ぎず。もし夫れ首府倫敦の如きに至つては、實に全人口の十六割を占む、則ち人口百人に就き十六人宛は首府に住めるの割合なり。此の如きは豈に驚くべき人口の集中に非らずや。（獨乙『農政時報』一九〇七年七月號）。

次ぎに之を獨乙に徵するに、都會の人口は千八百七十年に於いて全人口の三割六分を占むるに過ざりしものが、千八百八十五年には四割二分と爲り、更に千九百年には五割四分餘の多きを占むるに至れり。

（註）千八百七十一年と千九百年と此の三十年間に於ける獨乙の人口配分に就いて更に仔細を逃べんに、前の年に於いては村落（人口二千以下の地）の人口は二千六百二十二萬なりしに、三十年を經たる後の年に於いては減じて二千五百七十三萬

となり之に反し、都會の人口は、此の間に於いて千四百七十九萬より增して三千六十三萬の多きに及べり。

千九百年に於ける人口の總數は都部を合して五千六百三十七萬なるが、其の中人口十萬以上の大都會に集まれるもの總計九百十二萬。而して是等の大都會に就き（但しハルレ、クレフェルト、カッセル、スッツトガルトを除く）、博士シャットの調査せし處に據れば、上記三十ヶ年間に於いて其の都會面積の增加せしこと五割九分而して其の人口增加の速度は、三十年前當時の面積內に於いては十一割四分六厘、三十年後增加の面積內に於いては十二割八分八厘、都市の中心より十キロメートル（九十餘町）の範圍內に於いては十四割一分五厘の割合なり。而して其の人口の密度に至りては、此の間一ヘクタール（一町二十四步）に付き四十二人餘より九十人餘に上り、其の密度正に倍加せり。而かも此の間帝國總體の密度に至りては、僅に三割七分の增加を爲したるのみ。（フォン、デル、ボルヒト著『社會政策』三八八、三八九頁）。

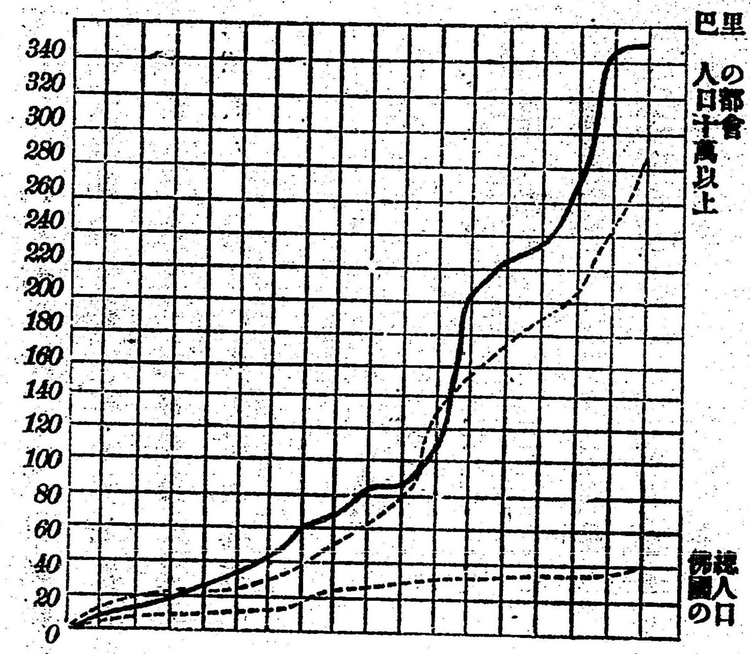
和蘭に在つては海外移住者の數頗る多しと雖も、都會の人口は等しく增加の一方に在りて、即ち千八百七十年より同九年に至る間に於いて、村落の人口は六分八厘を增加せしに止まれども、都會の人口は一割七分二厘の增加を爲したり。（ホフマン著、前揭書、三二七頁）。

然らば白耳義は如何。千九百二年デニスがブラッセルドルフに於

ける會議の席上に報告せし處に據れば、千八百四十六年より千九百年に至るの間、同國の人口は約五割四分の增加を爲したりしが、之を都部に內譯せば左の如しと云へり。（フォン、デル、ボルヒト著、前揭書、同頁）。

村落（人口二千以下）		減少	二分
都會	人口二千以上五千以下	增加	二割九分
	同五千以上一萬以下	同	七、九
	同一萬以上二萬五千以下	同	一六、四
	同二萬五千以上十萬以下	同	一八、六
	同十萬以上	同	二四、〇

若し夫れ佛國の狀態に至つては、ホフソン（前揭書、三二七頁）揭ぐる所の左の一圖に於いて明瞭なり。



然らば米國は如何。千九百七年十二月末日現在の調査に據れば、米本國(アラスカ及其他諸島を除く)の人口密度は一平方哩に就き平均二十八人の割合にて、之を千九百年度に比すれば二人宛即ち十四分の一を增加せり。然るに此の間、大都市の人口は實に左の如き增加を爲したり。

	一九〇六年	一九〇〇年	比較增加
紐育	四、一一三、〇四三	三、四三七、二〇二	約五分の一
市俄古	二、〇四九、一八五	一、六九八、五七五	同右
費府	一、四四一、七三五	一、二九三、六九七	約八分の一
聖路易	六四九、三二〇	五七五、二三八	同右
ボストン	六〇二、二七八	五六〇、八九二	約十四分の一
バルチモア	五五三、六六九	五〇八、九五七	約十一分の一

大都市殊にニューヨーク、シカゴに於ける人口集中の趨勢は之れによりて看取するに難からず。現に人口八千以上を有する都市(但しサンフランシスコ及ロスエンゼルスを除く)の人口は、此の間に於いて一割五分九厘の增加を爲したれども、村落の人口は僅に八分八厘の增加を爲したるに過ぎず。(倫敦タイムス)。

此の日、朝某法學士を訪ふ、夜某醫學士來談。

(一七) 農民減じて都會人殖ゆ

二十二日、英國總選擧終了して擧國一齊自由の雨黨僅に一點の差を以て殆ど同數の議員を選出したるの報を得。朝來曇天、所期の事業意の如くに進まずして、歲の將に暮れんとするを悲む。

吾人は以上述べ來りたる所に依つて、諸文明國に於ける國民の組成分子の近來太く變動したるの事實を知るに足るべし。即ち前々節に述べたる諸國農業の衰頽は國民の組成分子としての農民の割合が減少するに至れるの事實を暗示すると同時に、前節に述べたる都會に於ける人口の集中は又た國民の組成分子としての田舍漢の割合が減少するに至れるの事實を、暗示するものたり。

請ふ更に他の統計を擧げて農民減少の事實を證明せん。

英國の如く農業が根本的に轉覆したる國柄に於いて、農業勞働者の減少せるは自然の道理なりと雖も、其の割合近時に至つて全人口の三分五厘を占むるに過ぎざるを見ては、其の餘りに少數なるに驚かしむ。試に左表を見よ。（ローソン著『英國經濟』再版八

七頁。

イングランド及ウェールスに於ける農業勞働者の減少

年度	農業勞働者	人口總數	百分比
一八五一	二、〇一一、四四四	一七、九二七、六〇九	一一、二
一八六一	二、〇一〇、四五四	二〇、〇六六、二二四	一〇、〇
一八七一	一、六五七、一三八	二二、七一二、六六	七、三
一八八一	一、三八三、一八四	二五、九七四、四三九	五、三
八九一	一、三一一、七二〇	二九、〇〇二、五二五	四、五
一九〇一	一、一二八、六〇四	三二、五二七、八二三	三、五

即ち既往五十年間に於いて、人口總數は千四百六十萬を增加せしに反し、農業勞働者は八十八萬餘を減少し、其の人口總數に對する割合は一割一分一厘より三分の一以上に減じて僅に三分五厘と

爲れる也。

（註）右に揭げたる一表は農業勞働者の增減に關するもの也。もし廣く農業經營者を包含せる一般農民の增減を商工民の增減と比較せば左の如し。（ホワード著『獨乙產業の發達』がマルホール『統計辭書』より引用せるものに據る）。

	一八四一年	一八九五年
農業に從事する者の割合	三七、八	一五、一
工業（鑛業建築業）者の割合	三四、八	五三、七
商業に從事する者の割合	五、九	七、九

此の如き農民の減少は獨り英國に於けるのみならず、之れを獨乙米國等に徵するも亦た同じ。獨乙に於ける農民の割合は最近十三年間に次の如く減少したり。（フォン、デル、ボルヒト著、前揭書、一二

頁）。

	一八八二年	一八九五年
農業に從事する者の割合	四三、五一	三五、七四
工業（鑛業建築業）者の割合	三五、五一	三九、一二
商業に從事する者の割合	一〇、〇〇	一一、五二

佛國に於ける變遷は次表の如し。（メリーヌ著、前揭書、七六頁、ホブソン著、前揭書、二三四頁）。

	一八七六年	一八八一年	一八八六年
農業	五三、〇	五〇、〇	四七、八
工業	二五、九	二五、六	二五、二
商業	一〇、七	一〇、五	一一、五
其他	一〇、三	一〇、二	一一、一

即ち千八百七十六年には農民の數總人口の半ば以上を占めたりしに、十年後の千八百八十六年には四割七分に減少するに至れるなり。

次ぎに米國に於ける、既往十年間の變遷は次の如し。(引用書同上)。

調査年度	農業に從事する者の割合	工業(鑛業建築業者)の割合
一八九〇年	三八、〇	二四、一
一九〇〇年	三五、九	二四、一

事情此の如きが故に、農業に從事する者の割合より少き國は、左の如きものあるに至りたり。

調査年度		農業者	工業者
一八九五	英國	一五、一	五三、七
一八九〇	白耳義	二二、九	三八、二
一八八九	和蘭	二〇、七	三三、七
一八九五	獨乙	三五、七	三九、一
一八八八	瑞西	三七、四	四〇、七

(一八) 工業は必ずしも多數の勞働者を需要せず

農民の次第に減少して都會人の次第に增加しつゝあるは以上の如し。敢て問ふ、其の次第に增加しつゝあると云ふ都會人は抑々何を以て其の生業と爲すものなる乎。

思ふに近世の都會は既に述べたるが如く工業の產物なり。然らば其の都會に集中せる人口は、主として工業を以て其の生業とせ

るものなる乎。曰く、夫れ然り。豈に夫れ然らん乎。

吾人は先きに機械の發達を述べし際、獨乙に於いて使用せる機械動力は、千八百七十九年より千八百九十二年に至るの間殆ど倍加して七百二十萬餘馬力と爲れるの事實を擧げたり。今ま之を佛國に就いて云ふも亦た同じ。即ち千八百九十年佛國の產業に使用せられたる動力は八十六萬三千馬力なりしに、十年後の千九年に於いて二倍以上に增加して百七十九萬千馬力と爲り、更に千九百二年に於いては殆ど二百萬馬力に增加せり。殊に金屬工業の如きは、千八百九十年には僅に十六萬七千餘馬力を使用せしに過ぎざるに、千九百二年に於いては激增して三十五萬四千餘馬力となり、又た織物業に在りては、此の間に於いて十七萬二千馬力より四十三萬四千馬力に增加せり。（メリーマン著『歸農論』英譯四九頁）。

今ま一馬力は人間の勞力二十一人分に相當すと稱せらる。然らば單に是等動力の點に就いて云ふも、工業上に於ける勞働の需要は太に減少したるものと謂はざるべからず。況んや其の運轉せらるゝ所の機械そのものゝ爲めに、工業の生產力の未曾有の勢を以て激增せしものあるに於いてをや。故に彼の工業なるものは、壯人の想像するが如く、爾か多數の勞働者を需要するものに非らざるなり。

例へば之を英國の紡績業に就いて見るに、エリソンの云ふ所に據れば、千八百五十年より同七十八年に至るの間、「紡錘數は十八割九分を增加したれども、從業者の數は六割三分を增加せしに過ぎ

す。』又た『織物に在つては織機の數は三十六割の增加を示せども、從業者は二十五割三分の增加を爲したるに過ぎず』。（ホブソン著、前揭書、二二七頁）。更に之を近時の景況に徵するに、千八百九十一年に於いては紡錘の數四千五百萬なりしものが、千九百二年に於いては三分六厘を增加して四千七百萬と爲れり。然るに此の間に於ける勞働者の需要は却て三分八厘を減じ、六十萬五千人より五十八萬二千人と爲れり。（メーリヌ著、前揭書、六三頁）。猶は既往五十年間織物業に關する從業者の變遷を表示せば左の如し。

（ローソン著『英國經濟』九三頁）。

イングランド及ウエールスに於ける織物從業者の變遷

年度	織物從業者	人口百分比
一八五一	八九〇、六一八	五、〇
一八七一	一、〇三六、五四四	四、五
一八八一	一、〇三六、四八八	四、〇
一八九一	一、一二九、五八八	三、九
一九〇一	一五五、三九七	三五

次ぎに之を佛國の金屬工業に就いて見るに、千九百一年には百萬七百四十三噸を生產するが爲めに七萬二千人の勞働者を要せしものが、翌千九百二年には百萬八百八十五噸の生產を爲すが爲めに僅に六萬八千人の勞働者を要せしに過ぎず。即ち此の二年間に於いて勞働者の需要は約四千人を減少せしを見る。（メリーヌ著、前揭書、六三頁）。

機械の發達に伴ひ、工業上に於ける勞働者の需要は却て減退する

ものなること以上の如し。米國の統計學者として有名なるエドワード、アトキンソンの言として云ふに曰く

『かの繊物業に於いても、吾人が今日金屬工業に於いて見ると同じ狀態を呈するの日、蓋し遠からざるべし。……職工の數は次第々々に減少し、凡て仕事は自働的に行はるるに至らん。即ち繊物業の如きは全く機械的作業たるに過ぎざることゝ爲り、若干の專門家が機械を見張り居る傍ら、特に精選されたる熟練職工數人あつて機械の間を周旋せば事足るに至るべし』

之を要するに、工業上の勞働者の需要は、機械の發達の爲めに、啻に其の產額を增加する割合に增加せざるのみならず、寧ろ產額は增加するも勞働者の需要は却て之を減少せる場合少からず。故に、人若し工業品の產額增加を以て、勞働者の需要增加を意味するものと考ふることあらんか、そは大なる誤謬なり。固より機械の發達の爲めに、機械そのものゝ製造は新たに有力なる一の工業と爲り、從つて或種の勞働者に對する需要は是が爲め著しく增加したれども、是等の機械たる元と勞力の省略を目的とするものなるが故に、機械工業の發達の爲めに生せし勞働者一部の需要增加は固より其の全體に於ける需要の減少を補ひ得るものに非らざる也。

（一九）商人の激增

以上述ぶるが如く、農業者減じて工業者も亦た殖へずとせば、彼の沿々として都會に流入せる人口は、抑々何を以て其の生業と爲し

つゝあるやと云ふに、彼等は皆な機械の應用の未だ行はるゝに至らざる方面に趨ぎつゝある者にして、ローソンの語を藉らば彼等は皆な『勤勞』の提供者と爲りつゝある也。

試に英國に於ける既往五十年間の職業の變遷を見るに左の如し。（ローソン著、前掲書、八二頁）。

		一八五一年	一九〇一年
生産	原始産業	三四、〇	一六、〇
	加工業	二七、〇	二二、〇
動勢	衣食住に關するもの	二八、八	四二、二
	商業及運輸	六、一	一三、〇
	官吏會社員等	四、一	六、八
合計		一〇〇、〇	一〇〇、〇

就中商人の增加は最も驚くべき現象なり。例へば佛國に於ける商人は、千八百六十一年に百五十三萬七千人なりしに、二十年後の千八百八十一年には激增して四百六十四萬四千人と爲れり。即ち此の間に於ける增加數は無慮三百十萬餘人にして、一平方キロメートル（約方十町）の間に六人宛以上の商人を增加したる割合なり。是れ豈に驚くべき商人の增加に非らずや。而かも此の如きは啻に佛國に於けるのみならず、現時の所謂文明諸國に通有の現象たり。

要するに今の時代は、田舍漸減少して都會人の增加せる時代なり、農民減少して商人の增加せる時代なり。夫れ昔より農工商と云ふて、農を上位に置き商を下位に置く。然るに今ま上位の農次第

に減じて下位の商次第に殖ゆ、知らず、此の事諸國の國情に何の變をか來せる。

(二〇) 強兵亡びて弱卒殖ゆ

農民の減少、都會人の增加、——此の現象は一國の人情の上に、六ケしく云へば其の國民性の上に、著しき影響變動を及ぼさずんば已まざるべし。今ま吾人は只だ其の影響の主要なるもの丶一として、強兵の種子の是が爲めに盡きんとすることを述べん。

由來農民階級が強兵の泉源たることは、史學者社會學者農學者の或者が夙に認識せる所なるが、今ま試に其の原因を考ふるに、吾人は肉體的及精神的二樣の方面を擧げざるべからず。

而して肉體的方面に就いては、吾人は曾て『日本尊農論』に種々の事實を列擧して之を略論したることあり。蓋し農民階級の體格を以て之を他の階級に比するに、身長體重に於いて凡て優越するを常とするものなれば、一國の軍隊は主として農民より成立するものなり。乍併、何れの國に於いても農民の割合は次第に減少しつゝあるを以て、軍隊に於ける農民の分子も亦た之に從ふて次第に減少しつゝあり。而るに軍隊に於ける農民の分子が此の如く次第に減少するに於いては、其の軍隊を組織せる將卒の體格も自ら下落せざるを得ず、從ふて其の兵力は此の點に於いて衰微するを免れざる也。現に農民の分子極めて少き英國の軍隊が、四十五萬の大兵と七十億に餘る軍資とを以てして、南阿の一小國を征す

るに、少からざる年月と困難とを費したるは、直ちに其の一證として擧ぐるを得べし。

（註）徴兵檢査の成績に就いて都鄙の比較を爲すに、其の間の差異の著しきこと左表の如し。

例へば千八百九十五年獨乙に於ける徴兵適齢者數、百人に就き合格者の割合を見るに左表の如し。

管轄區域	合格者百分比
第一師團	六八、一六
第二師團	五七、四二
第三師團	五一、六七
第四師團	四九、五三
第五師團	六〇、〇八
第六師團	四六、二六
第七師團	五五、三〇
第八師團	五五、一二
第九師團	五五、四七
第十師團	五二、六〇
第十一師團	五三、九四
第十二師團	五二、二八
第十三師團	五六、八九
第十四師團	五四、〇〇
第十五師團	六〇、八七
第十六師團	六一、八三
第十七師團	六二、四五
第一バエルン師團	四五、四四
第二バエルン師團	五三、九三

右の表に依れば、第一、第二、第五、第十六、第十七師團の管轄區域內は最も多くの合格者を出せるに反し、第三、第四、第六、第十二、第一バエルン師團の管轄區域內は最も少數の合格者を出せしに止まれるが、前者は主として農業地に屬し、後者は之に反し主として商工業地に屬せるもの也。（フォン、デル、ゴルツ著『農業及農政』所載）。

更に千九百年及び千九百四年に於ける徴兵檢査の結果を比

較するに、千九百年に於いては百人の適齢者中五十五人餘の合格者を出せしに、千九百四年に於いては五十三人餘に減少せり。これ即ち人口集中の次第に著しきと共に國民の體格の益々羸弱を加ふるの事實を示すものなるが、更に之を地方別に就いて見るに、工業地方は其の成績特に宜しからずして、例へばザクゼン王國の如きは百人に就き五二・五、ライン諸州は五一・五、シレヂアは四六・六、ブランデンブルヒは四六・三の合格者を出せしに止るに反し、農業地方即ち東プロシヤは六六・六、西プロシヤは六六・一、ポーゼンは五九・一の合格者を出したり。(ユナイテット、サーヸス、マガヂンに據る)。

次に吾國の徴兵檢査の結果に就き、甲種に合格せし者及丁種に編入されし者の適齢者總數に對する百分比を示さば左の如し。(明治三十四年度の調査にして、横山雅男氏の製表に據る)。

管轄區域	甲種	丁種
第一師團(田都)會舍	三七、六四 三五、九七	九、二六 七、六五
第二師團(田都)會舍	三七、八四 三九、七二	九、七六 七、七二
第三師團(田都)會舍	二六、四七 三九、一七	七、六一 七、七〇
第四師團(田都)會舍	三〇、八三 三六、九八	九、八五 八、四四
第五師團(田都)會舍	二八、九七 三九、一八	八、八〇 七、七八
第六師團(田都)會舍	二八、九一 三五、一〇	九、九二 九、六五

第七師團	田都	三六、三八	四二、八六	一〇、二五	六、五三				
	舍會	三二、二八	四〇、一七	七、五七	六、五〇				
第八師團	田都	二五、五六	三三、二四	八、四八	八、四二				
	舍會	三七、七八	四八、四八	九、一三	七、一八				
第九師團	田都	二二、〇一	二六、二一	一一、〇八	八、八八				
	舍會	二五、〇九	二四、三一	九、二八	七、八九				
第十師團	田都								
	舍會								
第十一師團	田都								
	舍會								
第十二師團	田都								
	舍會								

右の表に據る時は、第一師團管轄區域を除くの外は、甲種に合格せし者の割合は凡て田舍に多くして都會に少く、又た第三師團管轄區域を除くの外は、丁種に編入されし者の割合は凡て田舍に少くして都會に多し。

更に明治四十年度の成績を見るに、其の市郡別左の如し。（乙種及丙種の合格者數を省略す）。

管轄師團		甲種		丁種		戊種		丁種戊種合計	
第一	市	三三、六三	四三、二八	九、五七	六、八六	〇、二九	〇、五八	九、八八	七、四四
	郡								
第二	市	三二、三六	三六、九三	八、四一	六、八四	一、〇一	〇、六一	九、四二	七、四五
	郡								
第三	市	三三、九六	四二、二三	一〇、七八	六、九七	三、七六	一、八〇	一四、五四	八、七七
	郡								
第四	市	三四、五三	三七、四九	六、一六	七、三一	〇、二〇	〇、三九	六、三六	七、七〇
	郡								
第五	市	三二、三六	四〇、二八	六、六七	六、六二	〇、七五	一、一五	七、四二	七、七七
	郡								
第六	市	二九、四六	二四、六四	五、八一	一〇、五〇	一、四五	一、〇三	七、二六	一一、五三
	郡								
第七	市	三四、七〇	四五、四九	六、九二	六、一一	〇、三四	〇、三七	七、二六	六、四八
	郡								

第八	市	二九、九七	
	郡	三八、六五	
第九	市	二八、五三	
	郡	三九、七五	

右の表に據る時は、第六師團管轄區域を除くの外、甲種に合格せし者の割合は凡て郡部に多くして市部に少く、第四、第五、第六師團管轄區域を除かば、丁戊兩種に編入されし者の割合は、凡て郡部に少くして市部に多し。

		九、三一	〇、七七
		六、六六	一、六八
			一〇、〇八
			八、三四
		七、五七	一、〇六
		六、〇九	〇、六五
			八、六三
			六、七四

（二二）軍人氣質の衰頽

以上述べたる所は單に體格の比較に止まれども、猶は其の外に最も主要なる事項は、農民滅じて都會人殖ゆるに從ひ、所謂軍人氣質なるものが次第に衰へ來ることに依つて一國兵力の上に著しき影響を及ぼすと云ふ事なり。蓋し軍人に尊ぶ所は其の忍耐力と服從性とに在り。而るに此の兩個の特性に富むことは、實に農民階級の通性たり。思ふに農業上の作業は其の成果を見ること甚だ遲く、普通の作物に在りても種子を蒔きてより收獲を得るまでには、少くとも數ヶ月を費さざるべからず。若し土地の開墾を爲すとか或は山林の養成を爲すとか云ふ場合には、其の成果を見んこと數年乃至數十年の後に在り。農業の性質既に此の如きが故に、之を以て其の平生の業と爲すものに在りては、一方に極めて遲鈍の短處を有すと雖も、他方に於いては、おのづから其の根氣を強くして、飽くまで忍耐力に富むものたるに至る也。是が故に、戰爭など云へる無趣味殺風景の事

業に從事せしむるには、田圃の間に育ちし壯丁に如くはなし。否な一歩を進めて云へば、古來の英雄皆な田畝の間に出でたり。加ふるに、農業は自然の抑制を蒙ること最も甚しきもの也。人は秋に蒔くを便とするも、氣候は必ず春に蒔くべきを命じ、而して人は此の命令に逆ふこと能はざるなり。或は又た刈り入るゝことは之を春に於いてするを便とするも、自然は必ず秋に刈り入るべきを命じ、而して何人も之に唯々諾々たらざるべからず。即ち自然と云へる無上の權力者ありて常に農民に臨み、彼等に向つて絶へず一定の號令を發し、苟も之に反抗するものは其の職業を失ふの外かならしむ。而して時としては、或は暴風を以てし、或は洪水を以てして、一時に粒々辛苦の成果を一掃し去ることあり。是の

故に、農民は常に絶對の命令と無上の厭制とに慣る。是れ其の動もすれば卑屈に流れ頑冥に陷るの弊あると同時に、他方に於いては、能く上官の命令に服從する好個の兵士を出す所以にして、かの社會主義の如きが最も農村に入り難き所以も、職として亦た是等の事情に本く。思ふに理想の軍人として具ふべき條件は一にして足らざるべきも、この忍耐力と服從性とは中に就いて最も主要なるものゝ一たらん。而して農民階級は最も能く此の二個の性質を具ふ、是れ其の常に强兵の泉源たる所以なり。

此の日朝來書窗に蟄居す。夜九時筆を投じ、市中歲暮の景を見んとして町に出で、歸途菊水煎餅を買ふて歸る。

（二二）分業の發達——自足經濟廢れて營利經濟起る——四民の商人化

廿三日、晴。此の書元と十日間を期して稿を起す、今ま所期の論題の三四を終らずして、指を折れば早や剩す所僅に三日、思ふに一生も亦た此の如くにして過ぎん乎。

夫れ現時に於ける經濟界の變動は枚擧し來らば殆ど限りなかるべしと雖も、吾人は、かの分業の發達及び之に伴ふ經濟組織の變動を記述せずして進む能はず。

アダム、スミスの『國富論』の冒頭には留針に就いて有名なる分業の一例を擧げたり。其の一節に曰く

『留針の製造たる、今日の狀態に在りては、其の全體の仕事が、晉に一個特別の職業と爲り居るに止まらずして、更に幾多の部分に分割せられ、而して其の分割されたる各部分の仕事が亦大部分は同時にそれ〳〵特別の職業と爲りつゝあり。即ち或者は針金を引き出し、他の或者は之を眞直にし、第三に或者は之を切斷し、第四に或者は之が上端を尖らし、第五に或者は之が下端を砥いて頭を附くる樣にす。而して其の頭を造るのみの仕事が又た二三の特別なる職業に分れ、其の頭を針に附くることも亦た等しく一の特別なる職業たり。更に進んでは、其の針を磨くことが亦た他の職業と爲り、之を整へて紙に刺すことさへ矢張り一個の職業と爲り居れり。此の如く

にして留針製造に關する主要なる仕事は約十八段の作用に分たれ、而して或る工場に於いては一人の者が二三段の仕事を兼ね居れる處もあれど、或る工場に於いては是等十八段の仕事が一人一人に依りて分擔され居る有樣なり。』

以上は百三十年前に於ける舊話なるが、爾來機械の發達と共に分業も亦た急激なる進歩を爲し、今や七十二段乃至九十二段の分業に分たれ、一日平均一人の製造高無慮千五百萬本に上りつゝある の勢なり。

扨て是等九十二段の各分業に對して一人宛の勞働者を使用したりとせんか、一人一日の平均生産額は千五百萬本の割合なるが故に、その九十二人の勞働者が日々造り出す留針の數は實に十三億

八千萬本の多數に上るべし。扨て機械の發達及び之に伴ふ分業の效果として、生産の斯くも激增せるは誠に悦ばしき事に相違なきがされば とて十三億何千萬本と云ふ驚くべき數を以て日々生産せられ行かば、如何に針は細しと云ひ條、何人も之が處分に困らざるを得ざるべし。たとひ世界一の富豪にて、最早や此の上の金儲けは爲すまじと覺悟せる人にても、斯樣に澤山の留針が日々製造せられなば、如何にしても之を世間の人に賣りて處分する外なかるべし。況んや富者ならざる者に在りては、如何に澤山の針が出來たりとて、其の針を食ふて飢を凌ぎ其の針を着て寒を防ぐと云ふこと叶ひ難ければ、所詮之を賣りて衣食の料に換ふるの外なかるべし。

今まで斯かる必要に迫まられて其の針を賣らんとするに、果して之を買ふ者あるや無しやと云ふに、買ひたしと云ふ者は諸方に居ることなり。例へばかの百姓の如き、留針製造業者と違ひ、其の生産する所のものは直ちに採つて以て衣食の料とすべきものなるが故に、自ら作りたる五穀蔬菜を以て其の食料と爲し、畑に作りたる棉にては絲を紡ぎ、更にその絲を織りて衣服の料と爲す等、賣りもせず買ひもせずして、一應は其の經濟を立て得るものにて、かの留針の如きも若し其の必要ありとならば、自ら造りて之を使用せば事足りぬべし。さりながら自ら之を製造せんとする時は、終日勞作して僅に數本を得るに止るべきが故に、其の勞費は決して少しとせず。然るに今まで一方を見れば、盛に機械と分業を利用して一

人日に千五百萬本の割合にて之れを作り出しつゝあるものあり、而して造ること容易なれば賣る値段も亦た之に從ふて安く、僅に一錢の銅貨を投じなば直ちに數十本を求め得らるゝの事實ありとせば、誰しも自ら造ることを差控へて之を其の道の專門業者に求むるに至るべし。されば彼の大仕掛にて日々何億といふ留針の生產を爲しつゝある者も、決して其の捌け場には困らざる譯にて、即ち其の生產する所の留針は之を天下四方の人に賣り、彼は之に依りて其の食料を求め衣服を求め、此の如くにして其の生活上に於ける百般の需要を充すを得べし。されば當に留針製造てふ仕事の內部が七十二段乃至九十二段の分業に分れ居ると云ふにも止まらずして、之を社會より見なば、留針製造てふ仕事そのものが

又た一の分業として獨立せる專門の業務と爲り居れるもの也。

以上述べたる所は纔に留針の一例なれども、此の如きは啻に留針にのみ限れるに非らず。經濟の進歩に伴ひ分業は種々の方面に利用せられて利用厚生の術益々巧妙を加ふるが故に、仮りに之を百姓に就いて云へば、啻に針を買ふの必要おるのみならず、絲も買はではならず、反物も買はではならずと云ふ風に、經濟の進歩に伴ふて買ひたき品の數々殆ど限りなきに至るもの也。余が幼年の頃は、余は山口縣なる片田舍の或る城下にて育ちたるが、その頃の記憶に依れば、余が家を始めとして多くの家には必ず絲を紡ぐべき道具と織物の道具とありて、是等の道具に依り人々は綿より絲を紡ぎ、其の絲にて所謂手織木綿と云ふを織り、之を以て常服の料に充てしものにて、機織と飲炊とは若き娘の嫁入せんに缺ぐべからざる素養の如くに看做され居たりしかど、此の頃郷里に歸り見れば、絲紡の道具も織物の道具も皆な物置部屋の内に片付けられて、全く其の影を隱すに至れり。蓋し此の如きは、郷里の人々が勤勉の氣風を喪ひたるが爲めに非らずして、分業の發達の爲めに、到る所の經濟全く其の組織を一變したるに因るものなり。例へば紡績機械の發明ありしより、紡績業なるもの新たに勃興して、かの留針製造業と等しく獨立せる一個の專門業と爲り、宏大なる機械を運轉し複雜なる分業を應用して、價安く質善き品を盛に供給するに至りしが故に、かの勤勉質朴なる地方村落の住人と雖も、遂に自產するを愚かなりと爲して之を市に買ふに至れるなり。

織物に就いて云ふも亦た然り。一たび市に出でゝ、柄の新らしきと着心地の好ささうなる反物の、いと廉價に買ひ求めらるゝを見ては、彼等如何で自ら織りて自ら着るを愚かとせざるを得んや。此の如くにして今の世は買ひたき物の類りに殖え行く世の中なり。かの百姓の如きは、本來より云はゞ、衣食の原料たるべきものゝ生産を業とすること故、自ら耕して食ひ自ら織りて着なれば何の差支なき樣なれども、右述ぶるが如く、今の時勢に於いては、絲も買はではならず、反物も買はではならず、其の他萬事萬端、金の要る事のみ多き世の中となれるが故に、萬穀も賣らではならず、蔬菜も賣らではならずと云ふ樣になりもて行き、遂には自ら用ひんが爲めならで、全く賣らんが爲めに其の業を營むに至る。今まで之を名けて自然經濟廢れて交換經濟起ると云ふなり、自足經濟廢れて營利經濟起ると云ふなり。

農業の如きさへ既に然り。故に今日の世に在りては、何人に取りても其の産物其の勞力は、只だ人に賣らんが爲めのものにて、自ら用ひんが爲めのものに非らず。即ち今の社會は賣らん哉〳〵と云ふ人々の集合とは爲れる也。されば又た商人なるもの出で、彼に買ひ此に賣り、百貨物資の交易融通を司るを以て己が專業と爲すに至る。

故に前既に述べし如く、今の時代は曾だに商人の激增する時代たるのみならず、一歩を進めて云へば、誰も彼も皆な一種の商人と爲れる世の中なり。昔は士農工商と云ひて、商人を最も卑きものと

爲し、其の性格を變つて商人根性と云ひたれども、今の世は、凡ての人が一種の商人と爲り、從つて商人根性流行の世とは爲れる也。是れ豈に時勢の大變に非らずや。

（一三）婦人問題起る

此の如くにして機械は分業を生み、而して其の分業が更に種々の結果を生めり。即ち社會一般の經濟組織が交換經濟營利經濟の組織と爲り、是が爲め凡ての人が一種の商人となり、商人根性が社會の上下に彌蔓するに至れることは、前既に一言せり、而して是が爲めに、各人の生活が甚だ不安固となり、定職を得ること次第に難く、從つて幾多の無職業者を生じ、此の事が遂に破壞思想釀成の一

因たるに至ることは、後に一言するの機會あらん。故に茲には、只だ、此の分業の發達が家族的生活の上に顯著なる打擊を加へんとするものなることを附記し置くに止めん。

分業の發達が家族的生活の上に及ぼせる最も顯著なる影響は、家庭内に於ける經濟的勞働の必要を激減したることとなり。吾人は前既に紡績織物に就いて少しく此の事を述べたりしが、而かも吾國の經濟は、後ちに詳しく論ずるが如く、其の發達の程度猶ほ甚だ後るゝが故に、之が爲めに生せる變動も亦た左迄大ならず、從つて又た、分業の發達の爲めに家庭に於ける經濟的勞働の必要を減少せし程度も甚だ少しと雖も、歐米諸國に在つては、經濟進歩の程度の我に比して甚だ高きだけ、家庭に於ける經濟的勞働の必要は殆

と其の最下限に達せり。從つて家庭に於ける婦人は、之を經濟上より云へば殆ど無用の長物たるに至りぬ。而して吾人を以て見れば、此の事たる、即ち近時に於ける最大問題の一たる彼の婦人問題の根本原因を爲すものたり。

吾人は必ずしも小人閑居して不善を爲すと云ふには非らざれども、婦人が家庭に於ける經濟上の無用物たるに至りしことは、婦人の心をして家庭の外に馳せしむるの一因なるを信せんと欲す。是に於てか上流の婦人は家庭を出でゝ社交場裏に入れり、是に於てか又た其の慾望は益々刺激され增長されざるを得ず。從つて上流婦人の奢侈は近時に至つて特に增長せり。故にルボンの曰く、「現時に於ける婦人の服裝流行の激變はど、廣大にして且つ永續的なる人世苦痛の原因たるものは非らず。歐米に於ける多くの繁榮なる都市は、其の變化の如何に依つては、一朝にして破產に次ぐに破產を以てすべし。而して其の慘害たる實に支那印度日本に於ける飢饉よりも猶は甚しかるべし」と。

即ち婦人は家庭に於ける經濟上の無用の長物たるに止まらず、一歩を進めて極めて高價なる贅澤品たらんとしつゝあり。故に歐米に在つては、男子の獨身生活を爲すもの漸く多く、從ふて又た婦人の嫁して妻たり得ざるもの亦た次第に多し。

此の如く家庭に於ける婦人は次第に經濟上の負擔と爲りつゝあるに際し、家庭外の工場は却て其の婦人を必要とするに至れり。蓋し到る所の工場は、機械の發達分業の應用の爲めに、比較的腕力

を要せずして婦人小兒の手に合ふべき新たなる仕事を有するに至れり。而して企業者は爭ふて低廉なる勞働を得んと欲するが故に、苟くも婦人小兒の手にて爲し得る仕事あらば、彼等は盛に之を使嗾して其の工場に驅り集めんと企つ（日本紡績業者の所爲を顧みよ）。故に上流社會の婦人が社交場裏に入れると同時に、下流社會の婦人は則ち工作場裏に入り、此の如くにして彼等は始めて獨立の所得を有するに至りたり。之を要するに、一切の婦人は皆な社會に出でたり。彼等の大多數は男子と競爭して其の職業を奪はんとしつゝあり。否な機械の發達分業の進歩が彼等の手より其の勞働を奪ひたるが故に、彼等は乃ち社會に出でゝ其の奪はれたる勞働を恢復せんとせる也。

是に於てか外は社會に、內は家庭に、現代特種の婦人問題は起り來れり。要するに時勢の變、因果相連なり、因は果を生み果は因となり、殆ど其の窮極する所を知らざらんとす。

（二四）未曾有の懸隔時代

吾人は以上を以て、今の時代が未曾有の進歩時代なることを述べ、次いで又た其の未曾有の變化時代なることを述べり。思ふに進歩の事例を擧ぐること既に足らずして、變化の方面亦た繚に其の一端を擧げしに止まると雖も、吾人は久しく一所に停滯するの餘日を有せざるが故に、今は進んで、更に今の時代が未曾有の懸隔時代なることを述べん。

茲に懸隔と云ふは主として貧富の懸隔を指す。思ふに古往今來如何なる時代に於いても、之を國際間に就いて見れば、富める國民あり、貧しき國民あり、之を一國に就いて云へば、富める階級あり貧しき階級あり。即ち貧富の懸隔は、東西古今、世の常相たりと雖も、而かも今の時代の如く其の懸隔の甚しき、又は甚しからんとするは、古來曾て有らざる所にして、恰も是れ今の時代の進歩が未曾有たり、今の時代の變化が未曾有たると、其の軌を一にし又た其の因を一にす。

(二五) 國際間に於ける文明の懸隔

先づ之を國際間に就いて述べんに、前に云へるが如く、既往百年間の進歩發達は、それより以前の數千年間に實現されたる進歩發達よりも更に〳〵大なるものなり。故に昔の時代ならば文明の程度に百年二百年の差ありと云ふも何の事は無けれど、今の時代に於いて若し文明の程度百年を後れたりと云ふも、其の差五十歩百歩ば是れ即ち數千年を後れたるに等しきもの也。之を譬ふるに、徒歩競爭ならば縱ひ勝ちたり後れたりと云ふも、其の差五十歩百歩に過ぎず。然れども今は汽車汽船のある世なり。故に甲乙兩人時を同くして西に向ひ京都を出でたりとせんに、徒歩による者は漸く杖を壇の浦あたりに曳くの頃、汽車汽船に依る者は既に遠く伯林に客たらん。實に恐るべき事なり。而して吾人は、此の恐るべき時に當つて、我が日本が、たとひ後れたりとは云へ尚ほ甚しく

後るゝこと無うして、夙に開國進取の國是を立て着々として機械の輸入發達を企てしの事實を回想して、眞に天祐の感を起さずんばあらざるなり。若し不幸にして後るゝこと更に五十年ならんか、如何で日清の戰に勝利あらん、如何で日露の戰に勝利あらん、又た如何で今日の如き國威の宣揚あらん。噫、嘗て燦然たる文明の宗國たりし印度の民よ。支那の民よ。何が故に今日の東洋諸國は爾く西洋諸國の壓迫を受くるに至りしかの眞因を知れりや否や。

(二一六) 貧富の懸隔

次いで之を一國内に就いて述べんか、何が故に今の時代は、凡ての國を通じて、貧富問題即ち社會問題たるの觀ある乎。何が故に貧富の問題が、凡ての國を通じて、最も重要なる社會の問題と爲りつゝある乎。

蓋し前にも云へるが如く、社會に貧富の懸隔を存するは古今東西諸國の常狀なりと雖も、獨り今の時代に於て其の懸隔未曾有の勢を呈せんとする所以は他なし、同一の國家内、同一の社會内に於いて、一方には彼の恐るべき魔力を藏する機械を所有して、無盡の所得を吸收しつゝある者あり、(今日の電報に依ればロックフェラーは シカゴ大學に向つて更に二千萬圓を寄附したるが、これにて前後七千萬圓を寄附したる計算なりと云ふ、一個人の一大學に對する寄附のみにて既に此の如し、即ち今の時はど恐るべき富豪を見るは稀なりと謂ふべし)、而して他方には此の如き有力なる機械の所

有に參與すること能はず、單に自己の腕力心力に依賴して纔に其の收入を得るに過ぎざる者ありて、兩者の間に於ける生產力の差異へば道具を所有せる人類と之を所有せざる畜類との差異に類するものあらんとすれば也。故に『弱者が今の如く無慘に壓倒されたる社會、成效者が今の如く一樣に强大なる社會、此の如きの短月日の間に私有財產及び家庭の享樂に此の如き不平等の起りたる社會は、既往に於いて未だ曾て見ざる所なり』（有名なる英國の史家メーンの語）。今機械を所有する者之を資本家と云ひ、然らざる者之を勞働者と云ふ。而して此の資本家と勞働者との爭鬪は即ち階級爭鬪にして、階級爭鬪を煽動する者は即ち社會主義たり、之を調和する者は即ち社會政策たり。

（二七）現代階級爭鬪の特性

思ふに何れの世にか階級の別なからん、又た何れの世にか貧富の差なからん。而して獨り今の時代に於いて、貧富の懸隔特に顯著ならんとするの理は前既に說けり、若し夫れ彼の階級間の爭鬪が獨り今の時代に於いて經濟的爭鬪たるの理に至つては、更に一言を費すの要あらん。

蓋し佛蘭西革命以前に於ける歐洲の諸國は、政治上及び法律上に於いて截然たる階級の別をなせしものなるが故に、是等階級間の爭鬪は、經濟上の利益を計るを以て其の主たる動機とせず、寧ろ政治上に於ける權力の爭奪を以て其の主眼と爲せしと雖も、一旦佛

關西の大革命を經てより、歐洲諸國の政治制度は大に其の面目を改め來り、國民は凡て政治上法律上平等の待遇を受くることゝ爲りしが爲めに、爾來の社會は只だ經濟上に於いてのみ不平等を存するに過ぎざることゝ爲れり。是れ此の時代以後に至つて、かの經濟上の利害が、初めて階級間に於ける爭鬪の自覺されたる目的と爲りし所以なり。加ふるに、近來經濟社會の急激なる進歩を爲したる結果として、社會は變じて營利經濟、自由競爭の世の中と爲りたるが爲めに、(此の事前既に一言したるが、後にも亦た重ねて說くの機會あらん)、凡ての人の經濟は極めて不安定と爲り、己れ他を倒さずんば自ら他に倒さるべき有樣とは爲れり。從つて之を勞働者に就いて云へば、彼等自身が一定の團結を成し、資本家に對して對抗の態度を執り、依つて以て其の經濟上の利益を增進すと云ふことが、新たに可能と爲り又た必要となり來りしと同時に、之を資本家に就いて云へば、自家の利益を無限に發展せしむることを以て、其の目的と爲すことが、又た可能となり且つ必要と爲り來れる也。是れ即ち社會政策の必要なる所以にして、又た實に彼の階級間の爭鬪が最も露骨に經濟的性質を發揮し來りたる所以なり。

(二八) 社會主義の勃興

若し夫れ社會主義に至つては論ずべき問題甚だ多く、殊に苟くも時勢の變を論ずるに當つては皆な看過すべからざる要目に屬すと雖も、日本現時の狀勢は今ま是等の問題を評論するを不可とす

るの事情あるが故に、盡く略して述べず。只だ左に歐洲諸國に於ける社會黨勃興の事實を列擧して、時代の動搖の一斑を示すに止めんと欲す。

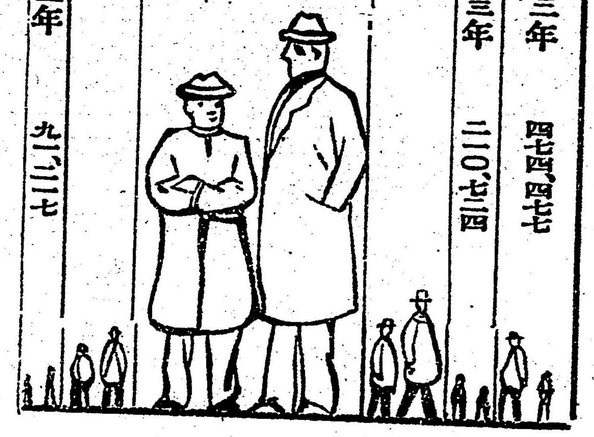
近時西洋諸國に於ける社會黨の勃興は驚くべきものあり。假りに其の議員選擧の投票數を見るに、千八百六十七年には僅に三萬票なりしもの、十年後の千八百七十七年には四十六萬四千票となり、更に其の十年後の千八百八十七年には九十三萬千票となり、爾來此の增加の趨勢は曾て停止したること無く、千八百九十三年には二百五十八萬五千票、千八百九十八年には四百五十一萬五千票、千九百三年には六百廿八萬五千票となり、更に千九百六年に至つては無慮七百萬票以上に達したりと稱せらる。

以下更に之を國別に就いて述べん。

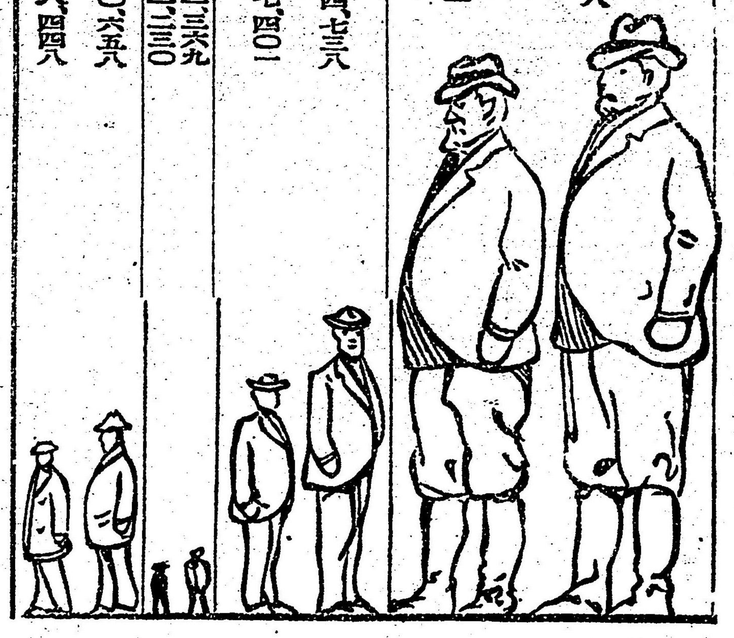
先づ佛蘭西は如何にと見るに、千八百八十七年の投票數は僅に四萬七千に過ぎざりしに、千九百二年の總選擧に於いては其の數激增して八十萬五千となり、五百八十四の議席中四十六は社會黨員に依りて占領さるゝことゝ爲れり。而して地方自治團體に於ける勢力も亦たなみ〳〵侮るべからざるものありて、現に市町村の行政が全く社會黨の掌中に歸し居るもの六十三の多きに上り、(其の多くは大都市なり)、其の蓋勢を占め居るものは百十一に達し、而して市町村長にして社會黨に藉を有する者は百二十人、其の議員たるものに至つては無慮千二百人の多數に上る。

若れ夫れ獨乙に於いて彼の社會黨が年々其勢力を擴張しつゝあ

るの事實は世人の既に熟知する所。今試に千九百七年度に於ける議會總選擧の結果を前回と比較するに、大要左圖の如き者あり。



雜	一九〇七年	二六〇、五一三	
	一九〇三年	一七二、五八二	
自由平民黨（ゲレフ及アルサス）	一九〇七年	七三四、五八二	
	一九〇三年	五三八、二〇六	
中央黨	一九〇七年	二、一八三、三八一	
	一九〇三年	一、八七五、二七三	一九〇三年 四七四、四七七
國民黨	一九〇七年	四四七、三〇八	
	一九〇三年	三三二、四〇四	
平民黨	一九〇七年	一四七、九三三	一九〇三年 九二、二一七



社會民主黨	一九〇七年	三、二五八、九六八
	一九〇三年	三、〇一〇、七七一
自由民黨	一九〇七年	一、六五四、七三八
	一九〇三年	一、三一七、四〇一
自由聯合	一九〇七年	三四三、三六九
	一九〇三年	三四三、一三〇
保守黨	一九〇七年	一、〇七〇、六五八
	一九〇三年	九四八、四四八

次に米國は如何と見るに、其の增加は亦た殊に甚しく、千八百九十八年に於ける社會黨の投票數は僅に二千票に過ぎざりしに、千八百九十六年には其の十八倍に增加して三萬六千票と爲り、千九百年には更に復た十二萬二千票と爲り、千九百四年には遂に四十萬八千票の多數に上るに至れり。

其他白耳義の如きは、千八百九十四年に於いて、社會黨の投票數既に三十萬に上り總數の約六分の一を占め、議會には二十八人の代表者を出すに至りたり。而して千九百四年の總選擧に於いても依然同數の議員を出し、殊に上院に於いて新たに八席を占むるに至りたり。

丁抹の勞働黨の投票數は、千八百八十年には七千に過ぎざりしが、千八百九十年には一萬七千二百三十二と爲り、千八百九十五年には三萬千八百七十二と爲り、更に千九百三年に至つては五萬三千四百七十九に增加したり。

和蘭の社會民主黨は千八百九十七年の總選擧に於いて既に一萬三千二十五の投票數を得たりしが、千九百年には其の數三萬八千二百七十に增加し、更に去る千九百五年の總選擧に於いては、復び增加して六萬五千七百四十三と爲り、議會に於いては百の議席中七個を占領するに至りたり。

然らば伊太利の社會黨は如何にと云ふに、其の投票數は千八百九十二年に於て二萬六千なりしもの、五年後の千八百九十七年には五倍以上に增加して十三萬五千となり、千九百年には十六萬四千

九百四十六となり、更に千九百四年には三十萬千五百二十五となり、而して其の選出議員の數は、以上の年間に於いて、六、十六、三十二、三十二と云ふ順序に增加したり。而して市の行政に至つては、既に百以上のものが彼等社會黨員の掌中に歸したりと云ふ。

那威に在つては、社會黨の投票數たる千八百九十四年には總體の三厘を占むるに過ぎざりしが、千八百九十七年には六厘となり、千九百年には三分二厘となり、遂に千九百三年に至つては一躍して一割三厘となり、其の投票數二萬四千五百二十六を算するに至りぬ。而して市町村會の選舉に於いては、既に千九百二年に於いて百四十七人の議員を選出したりと云ふ。

猶ほ埃太利に在つては、千九百一年の選舉に於いて社會民主黨は七十八萬の投票を得、十名の代議士を選出し、瑞典に在つては、千九百二年の選舉に於いて一萬の投票を得、四名の代議士を選出したり。

瑞西の社會黨も千八百八十四年以來急激なる進歩を爲し、同年の總選舉には僅に二千八百の得票を有せしものが、千八百九十年には一躍して二萬となり、千八百九十八年には約五萬となり、更に千九百二年には六萬三千に增加して、百六十七の議席中七個を占領するに至りたり。（以上主として、ゲムバルト著『社會主義及社會主義的運動』に據る）。

歐米諸國に於ける大勢は此の如し。知るべし、社會黨の勢力は轟々乎として今や歐米全土に澎湃することを。然らば其の汎濫の

餘波時に我國に及ぶものあるも亦た何ぞ怪むに足らん。夫れ魚行いて水渇る、產業革命既に成るの今日、誰か我國のみ獨り這個の葛藤を免れ得べしとするものぞ。是れ今後の日本が具眼の學者を要する所以の一なり。

此の日終日蟄居、人を訪れず人來らず。歌舞伎座の呂昇今夜を以て千秋樂と爲し、其の得意の三十三間堂を演ずる旨、今朝の新聞紙に見へたれば、五六年振りに行いて義太夫なるものを聽かんと欲し、朝來筆を走らせて並に來れば、夜既に九時、遂に時を失し畢んぬ。

(二九) 思想界に於ける未曾有の進歩

廿四日、今朝亦た晴快。机に向ふて坐せば、去る頃出京の折、舍弟に

貰ふて持ち歸へりしバラの葉、障子にうつりて朗に、窓を披けば、東山一帶の連峰春かと疑はる。

以上吾人は專ら經濟界に就いて、其の進歩と變動と懸隔とを述べたり。然かるに吾人の見る所に據れば、是等經濟界物質界に於ける進歩と變動と懸隔とは、思想界精神界に於いても亦た同じ樣なる進歩と變動と懸隔とを惹起せし原因たるが如くに思はる。請ふ先づ現代に於ける思想界の進歩に就いて述べん。

吾人の見る所に據れば、凡そ今の時代ほど科學の進歩の速なる時代はあらず。蓋し『科學的精神が、之を他の時代と比較して、現世紀(十九世紀)に於ける思想界の顯著なる現象の一たることは、世人の一般に承認する所ならん。人に依りては、科學を以て現代に於

ける主たる特徴と爲さんとするものあり。即ち過去の時代を以て晝學的時代と謂ひ、或は十五世紀を以て啓蒙時代と爲し、十六世紀を以て革命の時代と爲さば、今の時代は即ち科學的時代と謂ふべきもの也』（マーツ著『十九世紀歐洲思想史』一八九六年、第一卷、八九頁）。今吾人は、固より科學を以て思想の全部と爲すものに非らずと雖も、吾人が玆に今の時代を以て思想界に於ける未曾有なる進歩時代と爲すは、只だ此の科學の進歩を指すに外ならざる也。而して吾人の見る所を以てすれば、此の科學の未曾有なる進歩は即ち彼の機械の未曾有なる進歩實に之が根本の基礎たるに似たり。何を以て爾か云ふ、請ふ先づ一二の例證を擧げて來らん。

（三〇）科學の進歩と其の根本原因

今夏ハレー彗星天の一方に現はれてより、吾等門外漢は初めて近時に於ける天文學の未曾有なる進歩に心付きしこと也。元と彗星の形狀たる太く他の諸星と異る所あり、加ふるに昨日は東に見へしかと思へば今日は西に現はれ、其の出沒變化甚しきが故に、古へよりして人は其の出現を以つて凶變災禍の前兆と爲し、何れも心安かなる能はず、到る所の神社佛閣には祈禱の聲を絶たざりし事さへあるに、何事ぞ今日に於いては、何月何日何時何分には如何なる方面の如何なる邊に出現すべしと云ふ事さへ、早くより仔細に豫想され居るのみならず、其の豫想が又た一々事實となつて現

はれ來るが如きは、吾等をして天文學の進歩の實に急激なるに驚かしむるもの也。今ま此の如き天文學の進歩は何に本くやと問はんに、是れ固より簡單に答へられ得べきことには非ざらん。乍併、望遠鏡てふ一個の道具にして發明さるゝに至らざらんか、天文學が決して今の如き進歩を爲し得ざりしものなることは、余が如き門外漢と雖も敢て斷言して憚らざる所なり。乃ち科學の進歩が物質の進歩殊に機械の發明に刺激さるゝ所多きは、此の一例に依つても其の一班を知り得べし。

天文學と云へば其の研究物體の極めて廣大なる科學なり。今ま吾人は之と正反對に、其の研究物體の極めて微細なるものに就いて一例を擧げんに、彼の細胞學の如きは如何。此の學問も亦た最

も新しく發達したる科學の一なるが、其の發達の所因は何にありや。今日細胞學者は極めて高度の驗微鏡を用ひ、種々の精良なる藥品色素を應用して、細胞内部の構造殊に核の分裂の狀態に就いて、細密なる種々の研究を爲しつゝありと云へるが、若し是等細胞學者の手より其の驗微鏡を奪ひ、其の藥品を奪はゞ如何。彼等は到底何等の研究をも爲す能はざるに至るべし。然らば細胞學の進歩も亦た、近時に於ける物質界の進歩殊に機械の發明に負ふ所頗る大なるものありと謂はざるを得ざるべし。

植物學中近時の進歩著しきものとして、吾人は更に熱帶植物の研究を擧ぐることを得べし。而して其の原因は何ぞやと云ふに、等しく亦た之を物質界の進歩に歸せざるを得ざるを思ふ。物質界

の進歩の中、直接の關係あるものは、第一が交通機關の進歩なり。即ち交通機關の進歩の爲めに、多くの學者は熱帶地方に旅行して直接に其の地の植物を研究調査し、其の結果として、從來全く知られざりし事項又は極めて不完全に知られ居りしに過ぎざる事項が、極めて精確に研究調査さるゝに至りし也。第二は研究機關の設備が進歩したることなり。即ち印度、馬來地方、比律賓、南洋諸島、亞米利加、亞弗利加の各熱帶地方を通じて、今日は所々に實驗場、植物園等の設けあるが故に、精密なる研究調査が始めて容易となり又は可能となりたり。

之を醫學に就いて云ふも其の近時の進歩は甚だ顯著なれども、中に就いて特に其の進歩の著しきは即ち外科の部門にして、而して此の外科の部門が此の如く特に著しき進歩を爲せしは、諸種の機械の發明に負ふ所少からざる也。

而して以上述べたる如き自然科學が今の時に於いて甚だ急激なる進歩を爲せるに反し、社會科學の進歩が獨り遲々として大に遜色ある所以のものは他なし、是等社會科學の研究は物質の補助を藉ること少きが爲めのみ。されば等しく社會科學と云ふとも、其の物質の補助を蒙る部面に於いては、是れ亦た著々として其の面目を改めつゝあるを見る。即ち交通機關の進歩の爲め野蠻人種の生活狀態次第に研究せらるゝに伴ひ、總じて人種學的社會學的研究は近來大に其の發達を遂げつゝあり。而して彼の心理學の如き精神科學に在りても、近來諸種の機械の發明され應用さるゝ

に從ふて、所謂實驗心理學なるものは大に其の面目を改めつゝあるに似たり。

以上吾人は、科學の進歩を說くよりも其の原因を說くに偏したれども、之を要するに、科學殊に自然科學が近時に至つて未曾有なる進歩を爲せしこと、及び其の未曾有なる進歩が又た未曾有なる物質界の進歩に負ふ所少からざることは、恐らく讀者の承認を經たるべし。若し夫れ、智識の傳播、敎育の普及が、印刷術、製紙業乃至交通機關等產業上の進歩に伴ふて近時急激なる進歩を爲すに至りしことは、蓋し何人に於いても異存なき所たらん。知るべし、物質界の、未曾有なる進歩に伴ふて又た思想界に未曾有の進歩起りつゝあることを。

（三二）思想界に於ける未曾有の變動——傳說と科學、信仰と智識との衝突

吾人は先きに、今の物質界が未曾有なる進歩を爲せると同時に又た未曾有なる變動を爲しつゝあることを述べたり。今ま之を思想界に就いて云ふも亦た同じ。即ち今の思想界は、一方に於いて未曾有なる進歩を實現しつゝあるの傍ら、又た他方に於いては實に未曾有の變動を惹起しつゝあるもの也。

蓋し吾人の思想を支配する勢力に二あり。一を過去の思想の遺傳と爲し、一を現在の環境の影響と爲す。過去の思想の遺傳とは吾人の祖先が其の當時の境遇の影響を受けて作成せし思想の繼

承の謂なり。而して現在の環境の影響とは、現在の吾等が現在の四圍の境遇より新たに得來れる智識の集積の謂なり。思ふに如何なる時代と雖も、苟くも過去の思想の繼承なくんば、國家は則ち轉覆するを免れず、と雖も、而かも又た他方に於いては、常に新たなる境遇の影響を受けて、絶へず其の傳來の思想を改善し行くに非ざれば、曾に其の文明の進歩を見る能はざるのみならず、却て多くは退歩を招くを免れざる也。然り而して今の時代は則ち如何と云ふに、新たなる境遇の生み出だせし新たなる智識の餘りに多きに苦みつゝあるの時代なり。蓋し前既に述べたるが如く、今の時代の物質界は實に未曾有の激變大動を實現しつゝあるの時代なるが故に、此の新たなる境遇の刺激を受けて吾等の新たに生産

せる智識は、月を追ひ年を重ねて殆ど應接に遑なからんとす。前節に述べたる科學の進歩と云ふは、即ち此の新環境の産み出せる智識上の産物に外ならざるもの也。然るに是等科學上の智識の外に、吾等は吾等祖先の過去の思想を繼承す。而して是等の繼承的思想たる、數百年數千年を通じ、子々孫々相傳へて以て、既に血となり肉となれるの智識なり。即ち是等の思想は凡て吾等の感情となり、吾等の信仰となれる所のものの也。然るに是等の感情、是等の信仰を根本的に覆さんとするものは、即ち現代科學の産物たる所謂理性なり、所謂智識なり。故に今の時代は到る所に於いて、感情と理性と信仰と、智識との一大衝突あるの時代なり。即ち今の時代は、統一的感情、共通的信仰の上に根本の動搖あり、稀有の擾亂

あつて人心の不安不定を極むるの時代なり。今まこれを以て現代想界の大觀と爲す。若し夫れ仔細に亘つて各種方面の動搖を說かんは、余が力の固より及ぶ所に非らずと雖も、試に其の各種方面の動搖を一貫せる通有の變化に就きて、其の著しきもの一二を述べんか、是等動搖の渦中に於いて、吾人は先づ動搖の思想そのものゝ次第に湧出せるを看取するを得べし。

(三二) 進化思想起る

玆に動搖の思想と云ふは、彼の進化の思想を指す也。蓋し進化の思想は其の由來する所遠くギリシャの古へに在りと雖も、其の特に近時に至つて廣く吾等の思想を支配するに至りたる所以は、近時の物質的境遇そのものが變化動搖を極めつゝあるが爲めに外ならず。而して此の進化の思想を近世人に普及するに於いて大功ありし、彼のダルヰンの進化論が、計らずも、かの產業革命の曉に著述されたるアダム・スミスの國富論中に、其の萠芽を有するの事實は上述の關係に於いて、特に吾等の感興を惹く所なり。

千七百七十六年、即ちワットが其の蒸汽機關の特許を得たるより七年目の此の年は、亞米利加獨立宣言書の記草されたる年として有名なるのみならず、經濟學上に於いては、アダム・スミスの『國富論』の出でたる年として多くの人に記憶せらる。今まこの『國富論』の第一編第八章（カナン校定本、第一卷、八一頁）に左の如き一句あり。

『動物の凡ての種は其の生活資料に比例して自然的に増加する。
ものにて、又た如何なる種も決して其れ以上に増加するものに
非らず。云々』

しかるに此の書の初版發行以後二十二年にして、トーマス・マルサス其の有名なる『人口論』の第一版を著はし、其の中に論じて曰く
人口は必然的に其の生活資料に依つて制限せらる。然るに人
口は常に幾何的級數を以て増加せんとするの自然的傾向を有
するに反し、其の生活資料は算術的級數以上の速度を以て増加
する能はざるが故に、人口の自然的増加は常に生活資料の不足
に依つて抑制せらるゝを免れず。而して其の抑制は即ち罪悪
と窮困となり(人口論初版約五萬言の大意を摘錄したるもの)。

此の人口論たる、初版公刊以後當時一世の耳目を聳動したるもの
なるが、今ま其の議論の骨子に至つては、則ち先きに掲げしアダム・
スミスの一句中より得來れるもの也。(ボナー著『マルサス及其の
著述』三三頁脚註)。

此の人口論は其の著者の生時に於いて版を改むること六回、最後
の第六版は千八百二十六年に出だたり。然るに此の年を距ること
と更に三十三年にして、ダーウィンは其の有名なる『種の起源』を公
にするに至れり。而して此の『種の起源』が生物間に於ける生存
競爭を根據として生物進化の理を説きしものなるは世人の普く
知る所、即ち其の著述公刊以來今に迨んで既に百年、進化の事實そ
のものは今や全く學界の定論と爲り畢んぬ。然るに彼れ其の書

中に述べて曰く(ラシ■ナリスト印刷協會版、三三頁左欄)。

『こは(ダルキン自身の學説を指す)マルサスの學説をば動物界及び植物界の全般に向て最も有力に應用したるものなり、云々』

又た彼の『傳記』(第一卷八三頁)に曰く

『千八百三十八年十月、即ち余が余の系統的研究を始めてより十五ケ月目に、余は偶々興味を以てマルサスの人口論を讀みたり。……然り、此の書に於いて、余は遂に余の進化論を得るに至れる也。』

之に依つて考ふれば、ダルキンの自然陶汰の説は之をマルサスに得來り、マルサスの人口論は復た之をスミスに得來れるの事實を見るべし。

扨て聊か餘談に亘りたれど、此のダルキンの進化論出でゝより、先づ一切の自然科學は皆な其の影響を蒙り、次いで又た一切の社會科學が其の影響を受け、此の如くにして今や進化の思想は廣く社會の人心を支配するに至れり。即ち何物をも恒常のものと見ず、何事をも不變のことゝ考へず、一事一物凡て皆な進化流轉の道程に在りと爲すこと、是れ新人の舊人と異る思想上の特徴の一也。

(二三二) 物質主義起る

吾人は更に現代想界の第二特徴として物質主義を擧ぐるを得べし。

ゲーテ嘗てエッケルマンに書を寄せて曰く『余は君に或る事を語

らん、而して今後君は余の言の決して過まらざるを確めらるゝこと屢々ならん。退歩と荒廃との凡ての時代は主觀的傾向を有し、之に反し、凡て進歩的の時代は客觀的傾向を有す』と。思ふに凡そ思想史上の變遷は、主觀主義と客觀主義、即ち理想主義と物質主義と、此の二大主義の消長的發展に外ならず。而して物界の發展盛なるの時代は即ち物質主義客觀主義の盛なる時代にして、物界の狀態平靜に歸し乃至退歩の傾向ある時代は即ち理想主義主觀主義の行はるゝ時代たり。然るに今は、前既に屢々述べたるが如く、物界の進歩發展最も急激なる時なるが故に、吾人は特に今の時に於いて物質主義の廣く行はるゝを怪むものに非らず。

回顧すれば、ダルヰンの初めて『種の起源』を公にしたる千八百五十九年は即ち彼のカール・マルクスが其の『經濟學批判』を公にしたるの年なり。彼れ此の書中に論じて曰く（カウツキー出版本、序文一一頁）。

『余はギゾーの爲め佛蘭西より追はれたりしかば、巴里にて始めたる經濟上の研究は、之をブリッセルに於いて繼續したり。而して其の結果、余の到達したる一般的結論にして、既に之を得たる後は余の研究の指南車と爲りし所のものを、簡單に言ひ表さば左の如し。』

『人類は其の生活の社會的生活に依つて、一定の、必然的の、彼等の意思より獨立したる關係、即ち生產關係に入り込むものにて、而して其の生產關係なるものは、彼等の物質的生產力の一定の發

展の階段に適應するものなり。是等生産關係の總合は社會の經濟基礎を成すものにて、之を以て社會の眞の基礎と謂ふべく、其の基礎の上に法制上及び政治上の建物が築造せられ、又た社會意識の形式も之に應じて定まる也。即ち物質的生活の生産方法は、社會的、政治的及び精神的生活の凡ての經過を決定する所のもの也。』

即ちマルクスの意は、凡て社會人事の變遷の根本原因は經濟上に於ける生産方法の變化に在りと云ふにて、所謂唯物史觀、詳しく言へば經濟的唯物史觀と云ふもの即ち是れ也。思ふに鋭敏なる讀者は、現に此の『時勢之變』の著者それ自身が既に此の如きの史觀に傾けるに心付かられたるなるべし。而して此の如く、社會人事の變を説くに當つて其の物質上の所因を重視するは、畢竟史學の研究に於ける物質主義的傾向に外ならずして、纔て又た現代想界の物質主義的傾向の一面と爲すを得べし。

更に之を經濟學に就いて見るも、所謂歴史派の勃興以來學界の思潮は靡然として皆な之に傾き、從つて實證的、記述的研究專ら盛にして理想的演理的研究は多く顧られず。又た之を應用の方面に就いて云ふも、人々眼前の政策を論ずるに急にして、其の政策の據つて立つべき基本の理想論に至つては則ち空々焉たり。思ふに諸他の社會科學皆な亦た之と傾向を一にするものあらん乎。而して此の如きは亦た、現代想界の物質的傾向の一面を示すものに外ならず。若し夫れ文藝の壇上に於いて、彼の遺傳を重視し、本能

を重視し、境遇を重視し、物質を重視して精神の崇高を否認して發作的官能の滿足を謳歌し、理想の權威を否認して放縱なる刹那の快樂に耽溺せんとする、所謂自然主義乃至頽廢主義の文學の如き、是れ亦た、理想主義衰へて物質主義盛なる時代思潮の反射と爲すべし。

近時に於いて經濟界の進歩の最も速なりしものを獨乙と爲す。蓋し獨乙は今を距る僅に三十年以前に於いては、實に歐洲最貧國の一たりしものなれども、今や世界の經濟界に於いて、殆と英國を凌駕し來國と頡頏す。今ま此の如き獨乙に於いて、理想主義衰へて物質主義の盛なるは自然の理なり。頃ろドゥソン其の著『近世獨乙の進化』の中に曰く『若し十九世紀の前半を以て、獨乙に於ける精神の時代、理想の時代と爲さんか、其の後半は物質の時代なり、物資の時代なり。而して今日は即ち此の後者が其の全盛の時代なり。一世紀前には、獨乙は物資に乏しかりしも、而かも理想にには富めりき。今や物資に富むに至りしも、而かも昔時の理想、少くとも昔時の理想主義は既に地を掃ふに至れり』と（四頁）。猶彼の引く所、敎授ラインの言に曰く『單に物質上の價値と自然を征服するのみを偏重する一方主義は、其の影響最も恐るべきものあり。しかるに此の一方主義は、十九世紀の後半に於いて吾が獨乙に樹立さるゝに至りたり。即ち吾等獨乙人は最早や思想家、詩人、理想家たるの國民に非らずして、今は只だ自然の開發と利用に是れ汲々たり。……敢て問ふ、吾等獨乙人は、嘗てギリシャ人の實現

したるが如く、吾等の發達に於いて其の經濟的方面と道德的方面との調和平均を保ちつゝあるる乎。曰く否な、富の驚くべき增加につれて、暗黑の影は吾等の國民的生活の上に落ち來れり。國民としても個としても、吾等は富の增加と共に道德上の感情と道德上の力と次第に減退するを見る』と。以て其の一班を見るべし。

今朝來、終日蟄居して筆を執ると雖も、稿し終へたる所纔に以上に止まり、所期の問題にして猶ほ剩す所甚だ多し。而かも更に稿を進めんとすれば、筆重きこと錐の如し、已んぬる哉。夜十時記。

(三四) 物質主義流行の原因

二十五日、今日も亦た晴る。好晴相續くこと此の如きは、京に在つて珍らしき事なり。

扨て前節に於いて論じたるが如く、物界の發展急なるの時に當つては、科學の上に於いても、文藝の上に於いても、將た道德の上に於いても、一般に物質主義客觀主義廣く行はれ、理想主義主觀主義は則ち衰ふるを常とするものなり。今ま其の故如何にぞと云ふに、物界の發展急なる時に當つては、新事物新現象の開發出現踵を接して起るが故に、人は是等新事物新現象の應接に忙くして、之を調和し統一するの遑なければ也。姑く之を科學に就いて云はんか、從來一般に確定の學理、不動の法則と認識せられ居たるものも、今や新事物の開發、新現象の出現に逢ふて、全く其の學理たり法則たるの價値を失ふに至れるが故に、是等の學理法則を以て其の演理

の前提と爲す能はず。然らば新たに惹起せし事物現象を包括するの新たなる學理法則を樹立するを得るかと云ふに、其の新たなる事物現象そのものが曩を接して相起り、昨日まで見ざりし事が今日は新たに起り、今日までなかりし物が明日は又た新たに生ずと云ふが如き勢なるを以て、是等の新事物新現象より得來れる新たなる智識を統一して一の學理と爲し一の法則と爲すは、物界の發展急なるの時代に於いては到底不可能事たり。此の如くにして、古き學理と法則は既に其の學理たり法則たるの權威を失へると同時に、之に代りて一般の承認を經べき新たなる學理と法則は未だ樹立せらるゝに由なきが故に、凡ての學者は其の演理の前提と爲すべき論理の根據を失へる也。例へば甲は乙なり、乙は丙なりと云ふこと、既に樹立されある前提ならば、吾人は之に本いて甲は即ち丙なりと演理するを得べけれども、今の時代は、甲が乙なりと思ひ居たる事も誤謬なりと發見せられ、乙は丙なりと看做し居たる事も誤解なりと發見さるゝに至りし時代なるが故に、吾人は學問上に於いて何等安心立命の地を得る能はず、只だ續發し來れる新事物新現象の調査研究に忙殺せられて奔命に疲るゝの外なき也。故に學問上に於いては、演繹論的研究廢れて歸納論的研究獨り盛なり、智識の統一亂れて新智識の集積のみ徒に重疊たり、即ち學界を支配するものは客觀主義物質主義にして主觀主義理想主義は必然に衰ふるを免れざる也。

之を道德に就いて云ふも然り。物界の進歩極めて緩慢にして社

會の事相略ぼ平靜の狀態に在る時は、祖先傳來の信仰習慣が一般社會の道德の標準と爲り、各個人は之に依つて其の行爲の善惡を判定し得べけれども、今の時代の如く物界の發展急激にして、事々物々殆ど前代の面目を改めざるなきの時節に當つては、前代の習慣道德の中そのまゝの形に於いては新時代の事情に適合せざるもの漸く多く、少くとも前代の習慣道德が豫想せざりし新たなる事件、新たなる場合續發するを以て、(日本の今日にも斯かる事例多し、殊に新領土の合併は國家的道德の上に影響すること少からざるものならん)、一方には舊時代の傳說信仰次第に其の權威を喪ふと同時に、他方には新たなる道德の標準未だ樹立さるゝに至らず、從ふて各個人は其行爲の善惡を批判するに適從する所を知らず、

少くとも舊道德の權威を喪ふたるに乘じて動もすれば利己の衝動を是認するの弊に陷り、斯て識者をして『富の增加と共に道德上の感情と力とは次第に減退するを見る』と歎せしむるに至る。

三あり。

第一、今日は法律上政治上に於いて四民平等と爲り、只だ平等ならざるは之を經濟上に於いて見るのみと爲りたるの傾向あるが故に、個人の價値は往々にして其の經濟價値と同一視せらるゝの傾向あり。換言すれば、品性劣等にして人格卑く、人としての總體の價値は甚だ小なりとも、もし貨殖の術に長け莫大の富を致するの能力あらば、能く社會の上流に位し得て、人も亦た之を尊敬して怪

まざるが如し。

第二に、今日の經濟社會は自由競爭を原則とするが故に、幸にして致富貨殖に成效せば、前に述べたる如く能く社會の上流に位するを得べしと雖も、若し之に反し、不幸にして生存競爭の劣敗者たらんか、一家妻子を養ふにも窮するに至る。例へば之を封建時代に就いて云はんか、當時の武士には世襲の俸祿ありて世々に之を傳へ得たるを以て、不幸にして一家の主人早世することありとも、其の子は更に亡父の俸祿を襲ひ得て、一家爲めに困窮に陷るの憂なかりき。然るに今日の世に在りては、官吏の子は其の亡父の官職と俸給とを襲ふ能はず、勞働者の子亦た固より其の亡父の職業と賃錢とを襲ふ能はざるが故に、只だ單に此の一點のみより云ふも、

今日の社會に於ける各個人の生活狀態は甚だ安固を缺くに至りたりと云ふべし。而して各個人の生活が此の如く不安を增したることは、轉て其の物質主義を盛ならしめたる一因なり。

第三に、今日は物界の進歩急激なるの時なるが故に、功を樹つることは、忽ちにして一國を盛ならしめ、忽ちにして他國を衰へしむ』てふル、ボンの言は、吾人の先きに引きし所なり。今ま更に一例を引かんか、千九百九年度に於ける米國の玉蜀黍產額は其の價額三十四億四千萬圓なり。故に若し學者出でゝ其の收穫高を三パーセント宛(百分の三宛)增すことを發明したりとせば、其の結果毎年一億圓內外の富の增殖を爲すことゝ爲る。戰爭多き時代には戰功

樹て易きが故に、有爲の青年は爭ふて軍人と爲る。然るに今は、實業に於いて最も大なる勳功の樹て易き時代なり。然らば天下の青年、滔々相率ゐて實業に志すも亦た何ぞ怪まん。而して是れ亦た今の人心が一般に物質主義に傾く原因の一たり。

之を要するに、今の時代は舊道德廢れて新道德未だ備はらざるの時代なり、少くとも舊道德の一部廢るべきの時代なり、少くとも一部の新道德を要するの時代なり。學者經世に志あるもの、宜しく因果の相連る所を尋ねて、變るべきものを變らしめよ、廢るべからざるものを廢らしむる勿れ。

(三五) 破壞主義起る——其原因

以上吾人は現代想界の特徴として、第一に進化思想を擧げ、第二に物質主義を擧げたり。今ま第三に破壞主義を擧げて最後と爲さん。

茲に破壞主義と云ふは、經濟上政治上に在つては一部の社會主義及び無政府主義を指し、文藝上哲學上に在つては一部の快樂主義及び虛無主義を指す。即ち其の發する所必ずしも一ならず、所因亦た同じからずと雖も、要するに皆な時代の產物なり。

吾人の見る所に據れば、現代に於ける破壞主義發生の所因凡そ二あり。

其の一は、時勢の變遷に伴ふ必然の要求に出づるもの也。蓋し進化は凡て變化を意味す。即ち進歩とは、凡て舊きを破壞して之に

代ふるに新らしきを以てするの謂なり。故に古來發展の時代には必ず破壞主義起り、又た必ず破壞の事實あり。然るに今の時代は、既に屢々述べたるが如く、未曾有發展の時代なり。故に破壞の要求も亦た未曾有ならざることを得ず。然りと雖も、思想界に於ける急激なる破壞は最も恐るべき事件なり。固より吾人は、退歩を避け進歩を欲するが爲めに、常に其の祖先傳來の思想を改善し發展し行くの必要ありと雖も、而かも急激なる變化破壞を行ふて、一時に過去の思想の繼承を斷絶拒否することあらんか、國家は則ち轉覆することを免れざる也。故に今の如き物界の變遷急なるの時に當つては、想界の變遷は之に伴ふこと能はず又た伴はしむべきに非らざる也。即ち今の時代は、急激なる破壞の要求切にして而かも其の要求を容るゝ能はざる必要亦た甚だ切なるの時代なり。即ち痛切なる矛盾に耐へざるべからざる時代なり。物質上に於いて國際の競爭に後れざらんとすれば、科學の研究と普及は一日も緩うすべからず。故に政府は學校を立て研究所を設けて盛に之を奬勵すると雖も、而かも其の科學の所產たる智識と理性とが、祖先傳來の感情と信仰とを破壞せんとするは、『科學の叛逆』として之を禁壓せんと要す。是れ恰も魚を池に放つて游がざらしめんとするが如し。誠に困難なる事業なれども、今の政治家は此の調和すべからざる矛盾を調和するが爲めに最善の努力を敢てせざるべからず。扨て筆端計らずも餘岐に馳せたるが、要するに今の想界は、特に最も急激なる破壞を必要とすると同時に、如何

なる時代にても同じことなるが、其の急激なる破壊を喰ひ止むるの必要ある時代なり。即ち思想上に於いて必要なる凡ての破壊の未だ實現さるゝに至らざる時代にして、而して是れ社會の一部に急激なる破壊主義の叫聲を絶たざる所以なり。

第二に、吾人は時代の落伍者敗者を以て破壊思想の張本と爲すを得べし。蓋し既に屢々述べたる如く、今の時代は變遷の極めて急激なる時代なるが故に、社會の平靜なる時代と異り、其の所を得ざるもの甚だ多し。加ふるに今の時代は又た營利經濟交換經濟の世なるが故に、自然經濟自足經濟の世と異り、各人は其の能力を社會に提供し一定の價値を認識せらるゝに非らざれば、其の生活を維持することを能はず。委しく云へば、今日は分業の世の中とて、

衣食住其の他百般の生活資料は各人自ら之を生産するに非らずして、凡て他の生産したる物を購買して之を消費の用に供するなり。其の代り凡ての人は又た各々其の專門の職業を定め、商人とならば之に依つて一定の利得を收め、官吏とならば之に依つて一定の俸給を得、其の利得なり俸給なりを以て、日常百般の費用を支辨し行くの必要あり。此の如く今の時代は、凡ての人が其の生産物なり勞力なりを社會に提供し、社會より之に一定の價値を認められ、之と交換して相應の所得を得るに非らざれば、到底其の生活を維持する能はざる世の中と爲れるに、一方に於いては、前に述ぶるが如く、世態の變遷急激にして社會は一日も平靜なることを得ざるが故に、凡ての人が各々其の所を得て業に安んずと云ふ

こと、到底不可能事たり。故に今の時代に於いては、衣食の途に窮せる落伍者劣敗者を出すこと夥しく、而かも是等の落伍者劣敗者は自足經濟の基礎を有せざるが故に、生活の不安を感ずること最も甚し。蓋し彼等は社會が其の生存を必要とせざる徒輩なり、社會の爲めに其の存在の價値を認められざる徒輩なり。是に於いて乎、彼等の中元氣なきものは厭世主義に陷り、元氣あるものは則ち破壞主義の鼓吹者と爲る。殊に最も恐るべきはルポンの所謂 Demi-Savant（半學者）の一派なり。彼等は專門學校なり大學なりを卒業したる者なり。而して其卒業に當つては、縱ひ成績頗る劣等にして、學校は只だ厄介者を追ふの感をなして、縱に卒業せしめたるものなりとするも、彼等は既に一定の學校を卒業したりと云ふ

ことに依りて高く自ら評價し、而して社會が、其の高く自ら評價せる所を認識せざるに當つては、則ち相率ゐて不平黨と爲り、依つて以て、其の自ら信ずる所の自己の大なる價値を認むべき新たなる社會を造出せんと試むるに至る。而して此の場合に於いては、全く世用を爲さゞる彼等の智識能力も、始めて其の利用を見出すに至るべし。是れ教育ある社會の劣敗者が常に破壞主義の張本人たり傳道者たるに至る所以なり。（是の故に、吾人は、彼の青年の志望を指導せんとする世の識者が、最も其の言論を愼重にせんことを希望して已まざるもの也）。

要するに今の時は、此の如き特種の原因よりして、破壞主義の特に橫溢せんとするの危險ある時代なり。

（三六）思想界に於ける未曾有の懸隔

吾人は既に今の思想界を論じて、第一に其の未曾有なる進歩時代なる事を述べ、第二に其の未曾有なる變動時代なる事を述べたり。請ふ更に進んで其の未曾有の懸隔時代なる事を一言せん。

げに今の時代は物界に於ける貧富の懸隔最も甚しからんとするの傾向ある時代たると同時に、之を想界に就いて云へば、又た今の時ほど同じ時代同じ國土に於て、甚く懸隔せる思想の同時に存在するは稀なり。何となれば、今の時代の物界は、既往ならば數百年數千年を費して始めて實現さるゝを得べかりし諸種の進歩と變動とが、皆な一時に勃起せしの時代なるが故に、此の物界の進歩と

變動とに伴ひ、想界に於いても亦た數百年數千年に値するの大進歩と大變動とが一時に勃起したり。然るに一方に於いては其の大進歩と大變動とに伴ふて最も新らしき智識と思想とが勃起したるに拘らず、他方に於ては依然たる舊時代の感情と信仰との半乎として抜くべからざるものあり。乃ち最も新らしき思想と最も古き思想と同時に併び存するが故に、今の時代の思想界には自ら一大懸隔を存せざるを得ざる也。固より物界に於けると想界に於けるとを問はず、如何なる時代に於いても常に一定の懸隔を存するを免れずと雖も、今の時代は既に屢々述べ來れる如き未曾有の原因を包藏するものなるが故に、其の懸隔は自ら絶大ならざるを得ざるなり。

然るに彼の物界に於ける懸隔が最も憂ふべきの問題たると同じく、此の想界に於ける懸隔も亦た最も憂ふべき問題なり。夫れ國、國として強きは、其の國民に能く共同の思想を存すれば也。其の共同の思想が能く共同の感情、共同の信仰と化し、從つて一朝事ある時は、則ち能く所謂擧國一致の實を擧げ得るが爲めなれば也。故に古今東西如何なる國家の歷史に於いても、其の國家の最も光輝ある時代の歷史は、即ち其の國民の共同の思想の最も強大なる時代の歷史に外ならず。

然るに今の時代は、如何なる國家に於いても、此の共同の思想を維持するに最も困難なる事情あり。固より同じ時代に就いて之を横に云はゞ、交通の進歩、教育の發達等皆な共同の思想を維持し養成するの有力なる機關なりと雖も、之を古今に通じて縱に云はゞ、其の交通の進歩なり教育の普及なり、何れも皆な古來の感情信仰を破壞する所以ならざるはなし。是に於いて乎、『現時に於ける最大危險は吾人が殆ど何等共同の信仰を有せざるに在り』（ルボン）と謂はざるを得ざる也。而して是れ學者新思想を說くもの今の時に於いて最も愼重なる考慮を要する所以なり。

（三七）現代政治の要訣

今や吾人の論は以上を以て一大段落に會せり。仍つて上來述べ終へたる所を玆に要約して、更に後段の論を引出すの便宜と爲さんと欲す。

之を要するに、吾人は人類特有の文明の根本原因を道具の發明發達に歸し、近代特有の文明の根本原因を機械の發明發達に歸せんとする者なり。故に吾人は機械の發明以後を以て新時代と爲し、而して其の新時代に於いては、既往の歷史に於いて曾て見たることなき非常の進歩と變動と懸隔とが、先づ物質界に現はれたることを信じ、而して其の物質界の進歩と變動と懸隔とが更に所因となつて、今の思想界にも亦た非常なる進歩と變動と懸隔とが惹起されつゝありと信ずるもの也。

今まで之を物質界に就いて云ふも思想界に就いて云ふも、進歩は吾等の大に歡ぶ所にして、懸隔は吾等の大に憂とする所、而して彼の變動に至つては或は歡ぶべきものあり、或は已むを得ざるものあり、或は憂ふべきものあり。乃ち其の歡ぶべきを迎へ、已むを得ざるに從ひ、憂ふべきは則ち阻めて以て、吾等は最大最急の進歩を計ると同時に、又た最小最微の懸隔を存するに止めざるべからず。蓋し現代に處するの術、其の要を抽象すれば則ち此の數言に盡さん乎。

思ふに今の時に於いて、宇内に國する者能く天下に覇たらんと欲せば、先づ機械の發明發達に其の最善の力を致すと同時に、之に伴ふて起る物質界及思想界の懸隔に對しては又た其の最善の力を致して之が匡正に努めざるべからず。而して進歩と懸隔と能く其の調和を保たんと欲せば、彼の進歩に伴ふて起るべき變動に就き、能く其の取捨を選んで、敢て之が助長防止の策を過ること勿れ。

機械の發達を怠るの國家は外より亡されん、悪隔の調和を忘るる國家は内より破れん。語を寄す、吾國朝野の識者、彼の陥虎の危所に肯なると勿れ。

上來三十七節の論、昔て之を大阪の講演に於いて試みたりしに、僅に三十分間を費せしに過ぎず。今ま新たに若干の材料を補足して之を筆にし來れば、前後殆と十日を費しぬ。昔し終れば門外雨個の虚無僧、該暮なればや、來りて笛を吹く。午後五時記。

（三八）日本文明の進歩は速度早かり しのみ程度は大に後る

物質界及び思想界に於ける世界の現狀は以上の如し。今ま是の時に於いて我が日本國の狀態は果して如何。吾人は大に此の問題を論せんと期したりしも、豫定の期日將に本日を以て終を告げんとするが故に、誠に細論に遑なし。請ふ其の大部を讀者の判定に一任し、只だ一事の特に論述を要すべきものを附記して以て、此の小著の稿を終へん。

吾人の見る所に據れば、明治の維新は吾が日本民族が舊人類たるの域を脫して新人類たらんとするの決意を爲したるの時代也。道具時代の舊文明を棄てゝ機械時代の新文明に入らんとするの決意を爲したる時代なり。此意味に於いて明治元年は誠に維新の時期なり、吾等の永久忘れ難かるべき最も重大なる時期也。されば見よ、明治維新以來西洋發明の機械にして新たに輸入され

たるもの、誠に鷹を接せり。曰く汽車、曰く汽船、曰く電車、曰く電信機、曰く電話機、曰く紡績機械、曰く印刷機械、曰く何、曰く何。凡そ西洋發明の機械にして苟くも我國に應用し利用されべきものは、皆な擧つて之を輸入し模倣したる也。即ち彼の英國の如きに在つては、纔ひ急激なりしとは云へ、兎も角も前後殆ど百年を費して進歩し改善したりしものを、我國に在つては殆ど之を一時に輸入し模倣したるものなり。されば維新以後に於ける日本文明の進歩の速度が全く世界に類例なしと稱せらるも、誠に然るべき道理あり。然り其の進歩の速度の早かりしだけ、動搖、懸隔を生じたるの速度も亦た極めて早かりき。例へば、幕末の當時には鎖國擾夷を唱へたる我が國民に非らずや、然るに其の同じ國民が、明治の初年に既に鐵道を敷き洋館を建て、甚しきは男女洋裝して彼の鹿鳴館裡に舞踏を演じたりと云ふに非らずや。變動の甚しきこと、げに世界稀有の事例なるべし。

乍併、其の速かなるに驚くと云ふは、只だ短日月の間に於ける其の進歩の速度の速かなりしに驚くと云ふのみ、西洋諸國と比較すれば、進歩の程度に於いて今日と雖も猶ほ遙に〳〵後る。變動を實現したるの速度早かりしのみ、懸隔を惹起したるの速度早かりしのみ、其變動の程度、其の懸隔の程度に至つては之を物質上に就いて云ふも將た思想上に就いて云ふも、固より西洋諸國の比には非らざる也。

試に我が進歩の遠く後れ居れるの一證として、諸國富力の比較を

示さは左の如し。（「日本經濟新誌」所載、神戸博士の論文に據る）。

日本	一〇〇	獨乙	六八三
伊國	二六九	佛國	七四三
墺國	三八四	英國	一〇〇八
露國	五五一	米國	一三九七

卽ち米國の富の力の如きは我に優ること殆ど十四倍なり。聞く所に據れば、紐育に於ける最下級の巡査の俸給は年千六百圓なりとぞ。一巡査の俸給さへ此の如し。又た嘗て紐育に於ける貧民生活費の調査を見たるに、中に最貧民の極例として年收五百圓の勞働者を擧げあるを見たり。年收五百圓と云へば月給四十圓、我國に在つては略ぼ中流に位するを得べし。彼我富力の相違誠に此の如きものあつて存するなり。

（三九）吾國進歩の後れ居る原因

思ふに我が進歩の歐米諸國に比して後れ居るの原因凡そ二あり。而して其の一は機械の應用彼に比して太く後れたること是れなり。蓋し前既に述べたるが如く、英國に於ける機械時代の第一頁は、今を距る約百三十年前の西曆千七百六十九年にして、正に吾朝後櫻町天皇の安永六年に當れり。然るに我が機械時代の第一頁たる明治の維新は、今を距る僅に四十餘年にして、則ち我の彼に後れたること殆ど百年なり。然らば我國の進歩が遠く彼に及ばざるも亦た何ぞ怪むに至らん。

機械の應用此の如く後れたるが上に、其の應用の範圍今に至つて